

## 第二節 8号竪穴

### 1 竪穴埋土の様相と層序

8号竪穴の発掘調査も現地表面の凹みに基づき発掘区を設定し、セクションベルトは7号竪穴と長軸が同じであろうと推定して、Ⅷ-48とⅩⅣ-50を結ぶ南北方向と、それと直行する東西方向に設けた。埋土の厚さは住居中央部で約30cm、最も厚い住居東側コーナー部壁際では約160cmであった。竪穴埋土の土層堆積は以下のとおりである（竪穴埋土の基本層序であるⅠ～Ⅳ層については第一章第一節参照）。

Fig.60：a-b ライン（1～15が竪穴埋土、16は竪穴床面より下層の堆積、17～21は竪穴外の土層）

- 1：黒色土。植物の根と腐葉を多く含み、土のしまりが悪い（Ⅰ層）。
- 2：黒褐色土。植物の根と腐葉、砂を含み、土のしまりがやや悪い（Ⅱ層）。
- 3：暗褐色土。砂と炭化物を含む（Ⅲ層）。
- 4：暗褐色土。3よりやや色調が明るい。砂、炭化物、黄褐色粘土粒、焼土粒、骨片を含む（Ⅳ層）。
- 5：褐色土。やや黄色みを帯びた色調。粘性が強い。
- 6：暗褐色土。炭化物を含む。
- 7：黒褐色土。炭化物を多量に含む。
- 8：褐色土。焼土が混じる。
- 9：黒色土。炭化物を多量に含む。
- 10：焼土。炭化物を少量含む。
- 11：焼土。
- 12：暗褐色土。炭化物を含む。
- 13：灰褐色の灰。焼土を含む。
- 14：焼土。やや褐色に近い色調。
- 15：褐色土。やや黄色みを帯びた色調。砂を含む。
- 16：褐色砂。やや黄色みを帯びた色調。

Fig.60：c-d ライン（1～10が竪穴埋土、11は竪穴床面より下層の堆積、12～18は竪穴外の土層）

- 1：黒色土。植物の根と腐葉を多く含み、土のしまりが悪い（Ⅰ層）。
- 2：黒褐色土。植物の根と腐葉、砂を含み、土のしまりがやや悪い（Ⅱ層）。
- 3：暗褐色土。砂と炭化物を含む（Ⅲ層）。
- 4：暗褐色土。3よりやや色調が明るい。砂、炭化物、黄褐色粘土粒、焼土粒、骨片を含む（Ⅳ層）。
- 5：暗褐色土。3に近い。
- 6：焼土。8号竪穴古段階のものと思われる粘土貼床の破片が含まれている。

- 7：黒褐色土。炭化物を含む。
- 8：暗褐色土。層の下部（9との層界）に黄褐色ロームを含む。
- 9：黄褐色ローム。黒褐色土のブロックを含む。
- 10：暗褐色土。8に近いが、土のしまりが8より悪い。
- 11：褐色砂。やや黄色みを帯びた色調。
- 12：黒褐色土。2 とほぼ同じ。
- 13：暗褐色土。砂を含む。
- 14：黄褐色ローム。暗褐色土のブロック、砂を含む。
- 15：暗褐色土。ローム粒を少量含む。
- 16：暗褐色土。
- 17：褐色土。炭化物、焼土粒を含む。灰を少量含む。
- 18：暗褐色土。炭化物、焼土を少量含む。

竪穴の窪みの中央部付近には盗掘坑とみられる攪乱が確認され、その一部は住居の床面まで達していた。7号竪穴のⅡ層でわずかに確認された白色の火山灰は、8号竪穴のⅡ層中でもごく一部でわずかに検出されたが、やはり面的にまとまった状態では確認されなかった。竪穴の北東部の壁際付近のⅣ層上部では、焼土に混じって、後述する8号竪穴古段階の貼床とみられる焼けた粘土片がまとまって検出されている（Fig.60:c-d ラインの6層）。竪穴の「掘り方」と壁材の間の空間に充填されていた「裏込め」の土が崩れたものと考えられる。この部分以外でも埋土中に焼土が確認されているが、それらは床面の直上に位置するものが大半であった。後述する金属器の説明の項で述べられているとおり、竪穴内埋土Ⅰ層のア区からは鉄製品が比較的多く出土しており、これらは近世アイヌ期から近代にかけて竪穴の窪みに投げ込まれたものと考えられるのだが、竪穴の埋土中からはこれらの鉄製品に関連するような遺構（送り場等の痕跡）は確認できなかった。

c-d ラインの12～18層は竪穴外の土層堆積であるが、内容は竪穴内の埋土と共通する部分があり、人為的な活動の痕跡が認められる。8号竪穴古段階の竪穴の埋土か、もしくは古段階の竪穴の廃絶後に8号竪穴を作り直した際の排土である可能性が考えられるが、この部分は崖際にあって土層堆積が崩落しかかっており、竪穴の掘り方の位置や建て替えの詳しい過程は復元できなかった。

8号竪穴も廃絶時に火を受けており、粘土の貼床は熱でレンガ状に硬化していた。住居北西側の壁面には炭化した樹皮・板材による壁や柱材が残っていたが、南東側ではほぼ完全に焼失しており炭化材はわずかししか残存していなかった。

なお、竪穴外の表土を掘り下げている際に、竪穴の北東に隣接する区域（Ⅶ-46区）でオホーツク貼付文系の完形に近い土器が検出されている（Fig.67、Fig.87-136）。周囲に墓等の遺構がないか精査したが、遺構の痕跡は確認できなかった。

（熊木俊朗）

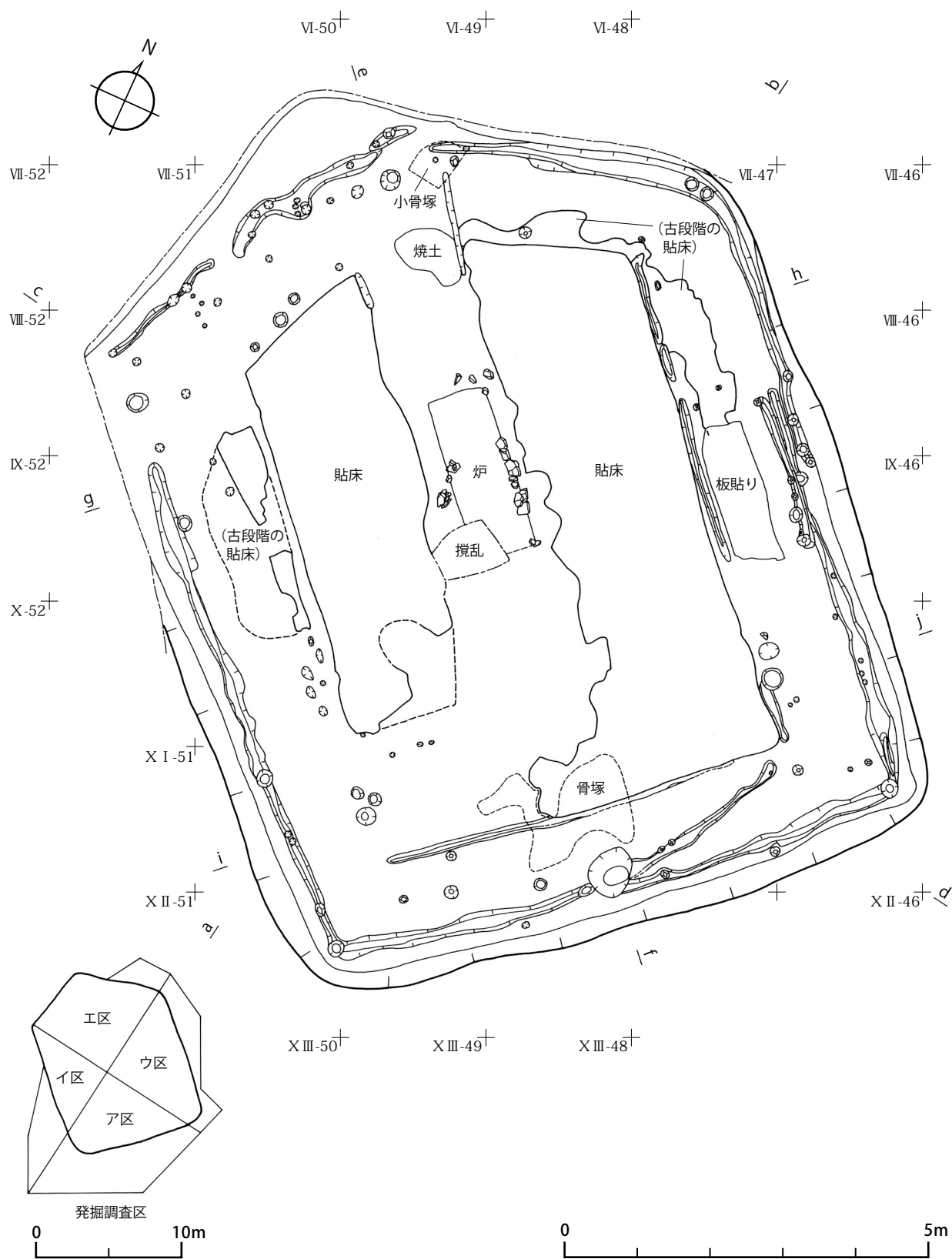


Fig. 59 8号竪穴平面図

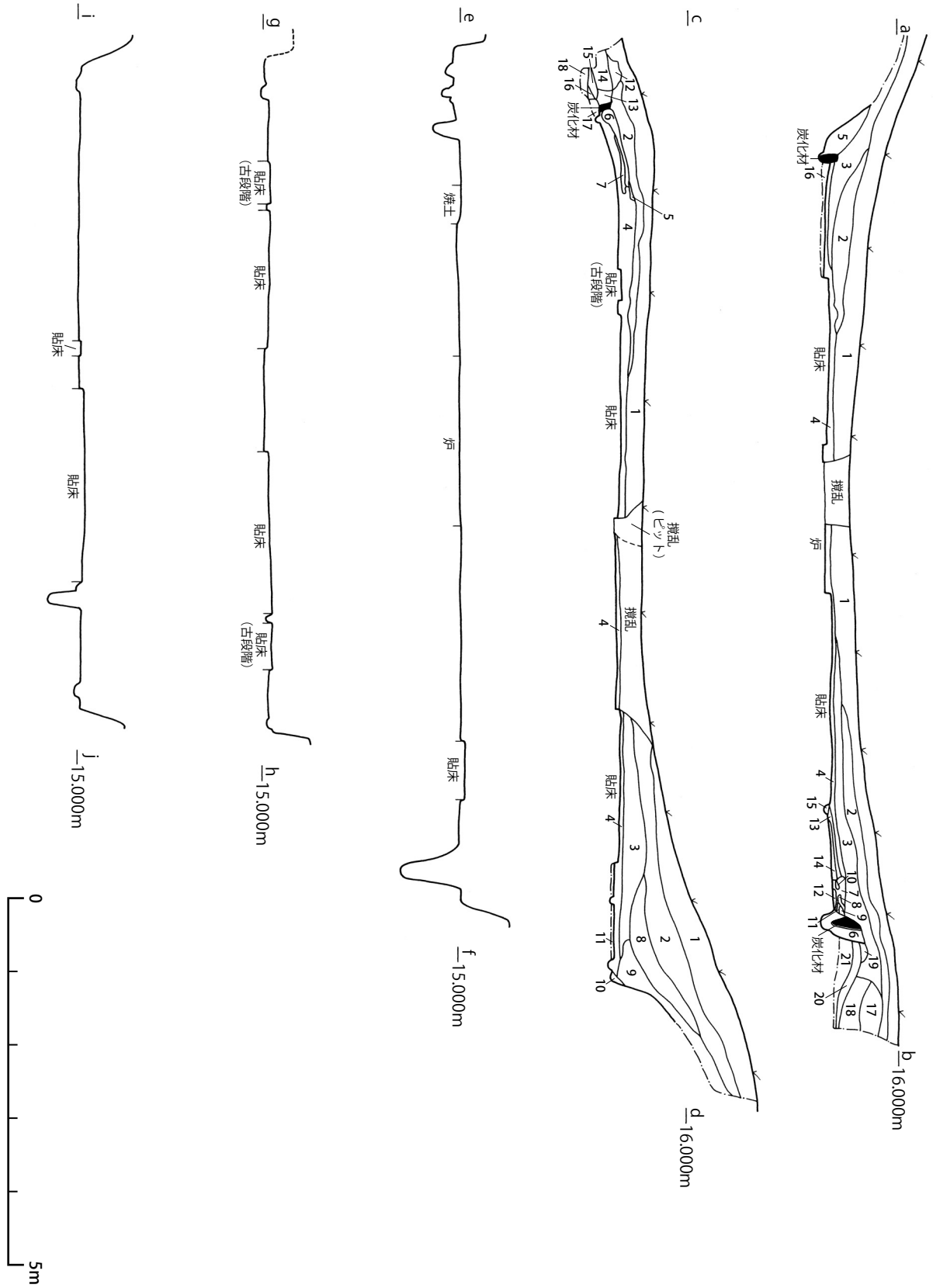


Fig. 60 8号竖穴土層図・エレベーション図



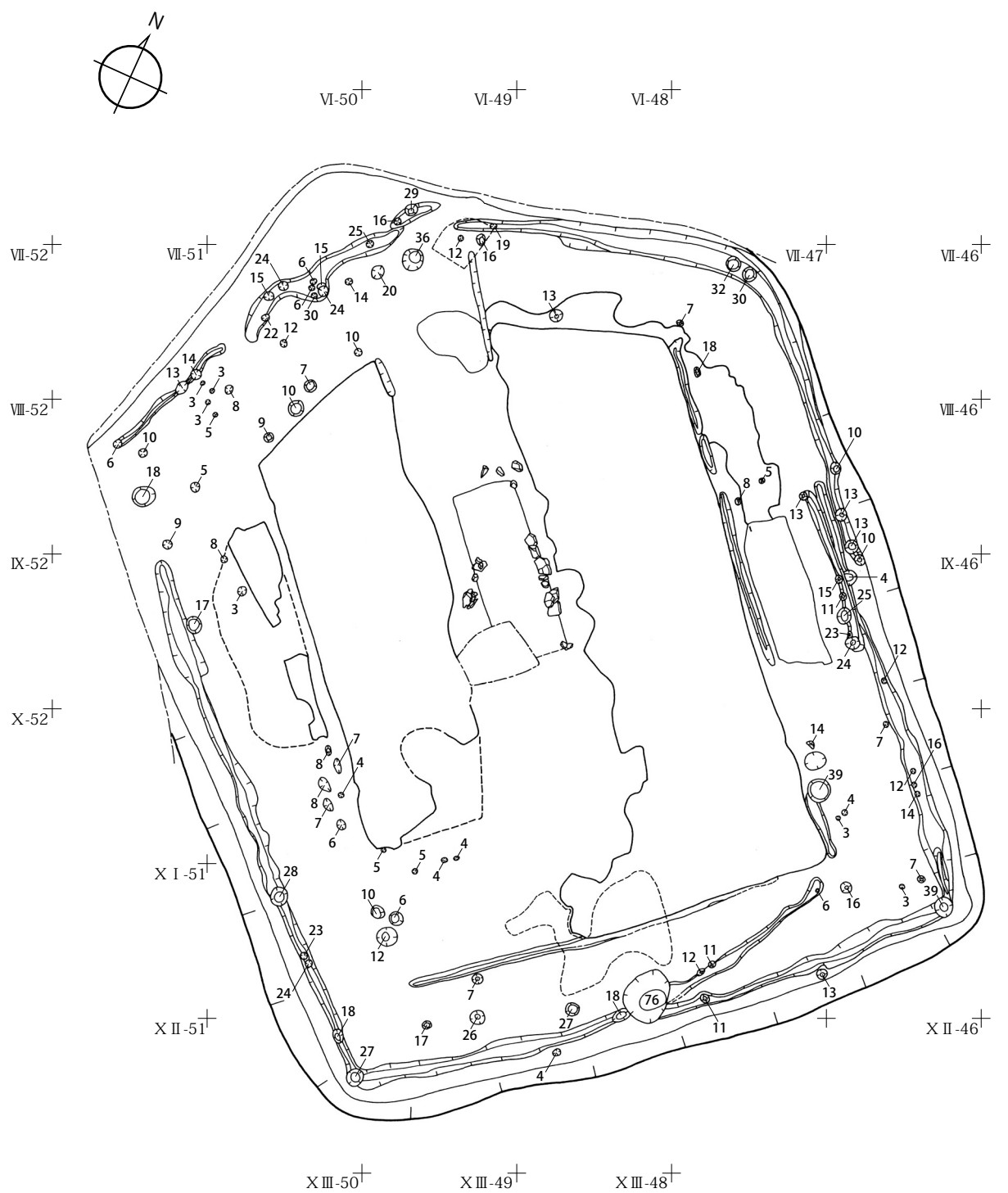
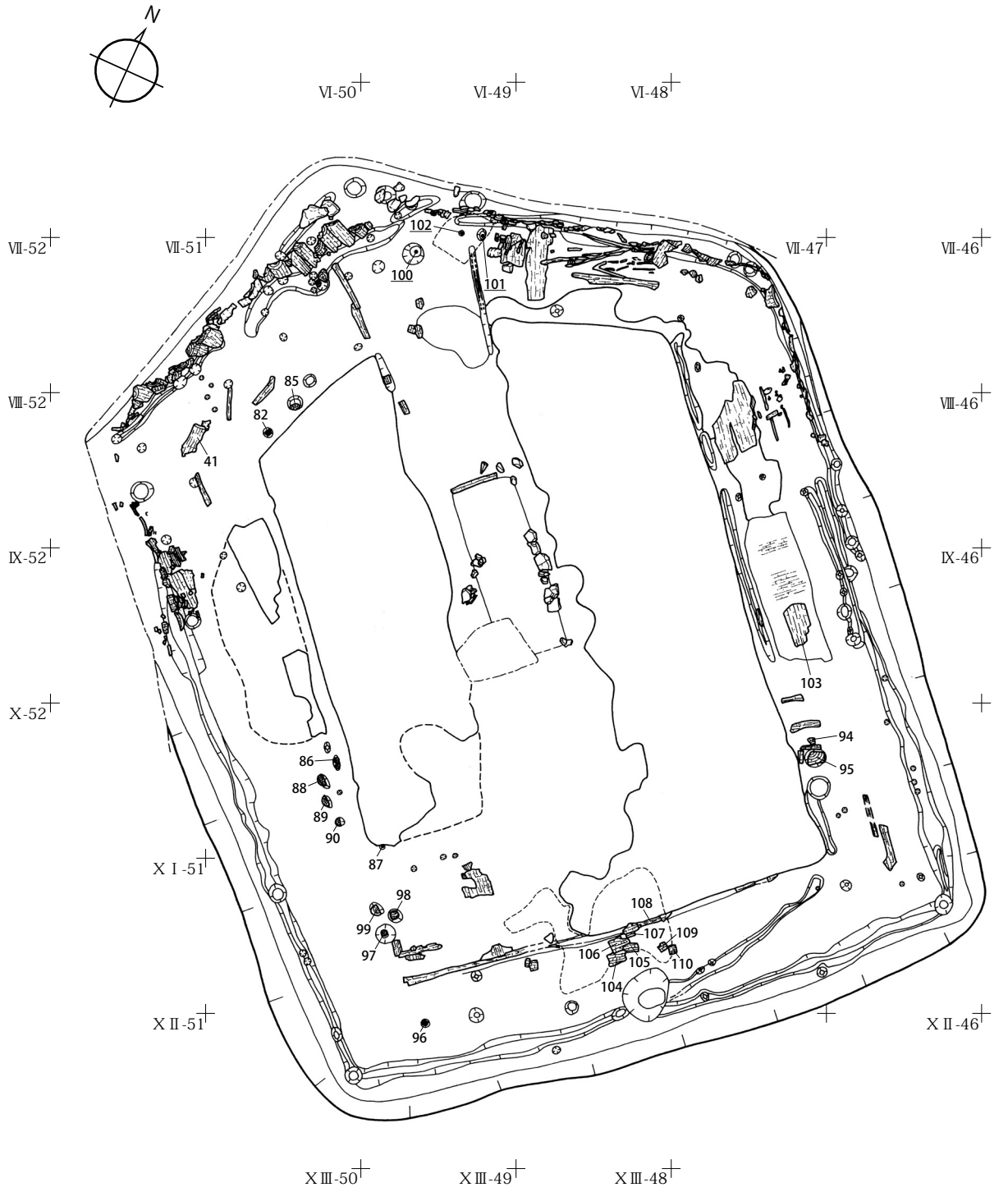


Fig. 61 8号竖穴柱穴の深さ (床面から-cm)



番号は樹種同定した炭化材のNo. (下線は出土位置のみで微細図はない)  
 (第三章第八節 Table1~2 参照)



Fig. 62 8号竖穴床面の炭化材出土状況

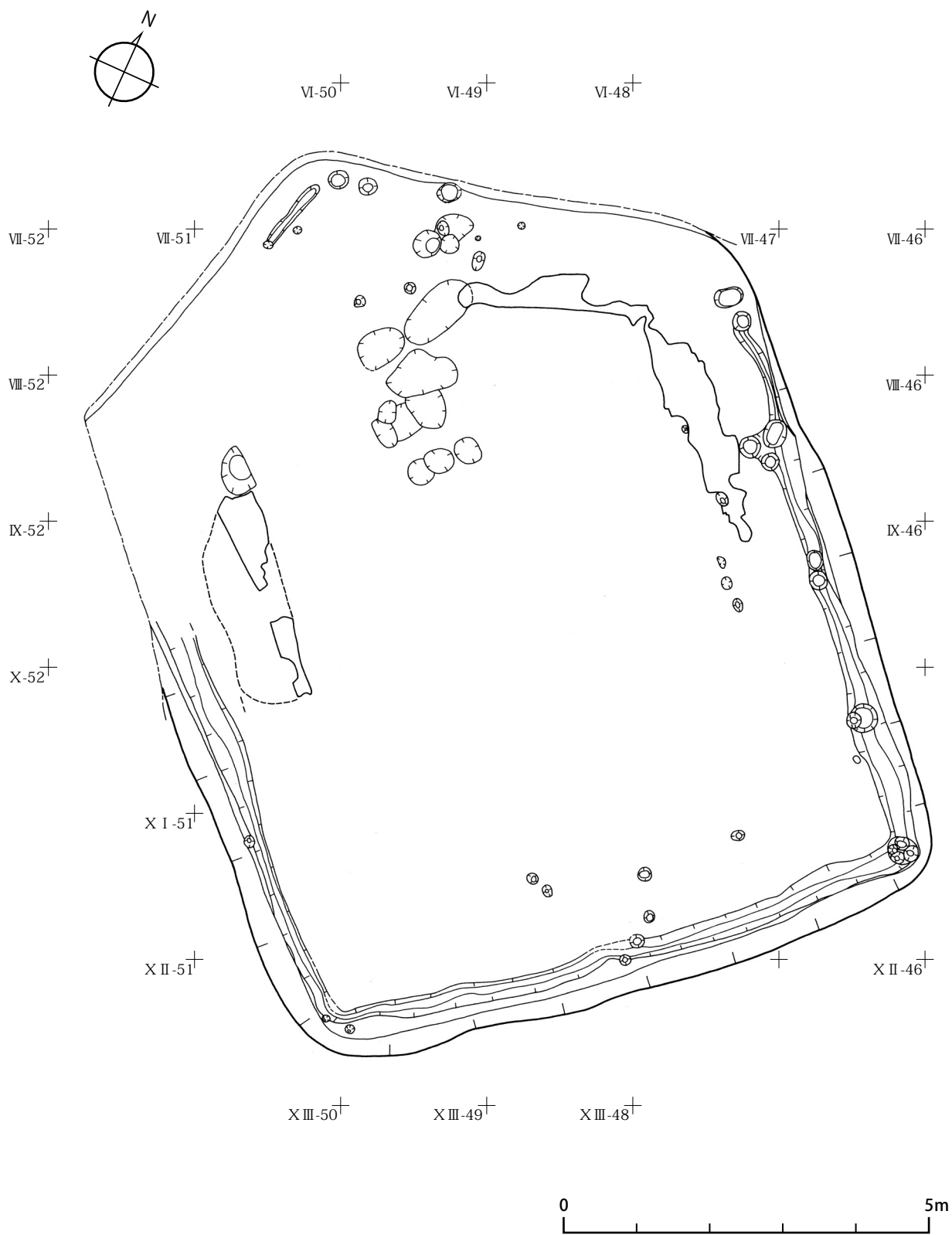


Fig. 63 8号竖穴（古段階）平面図

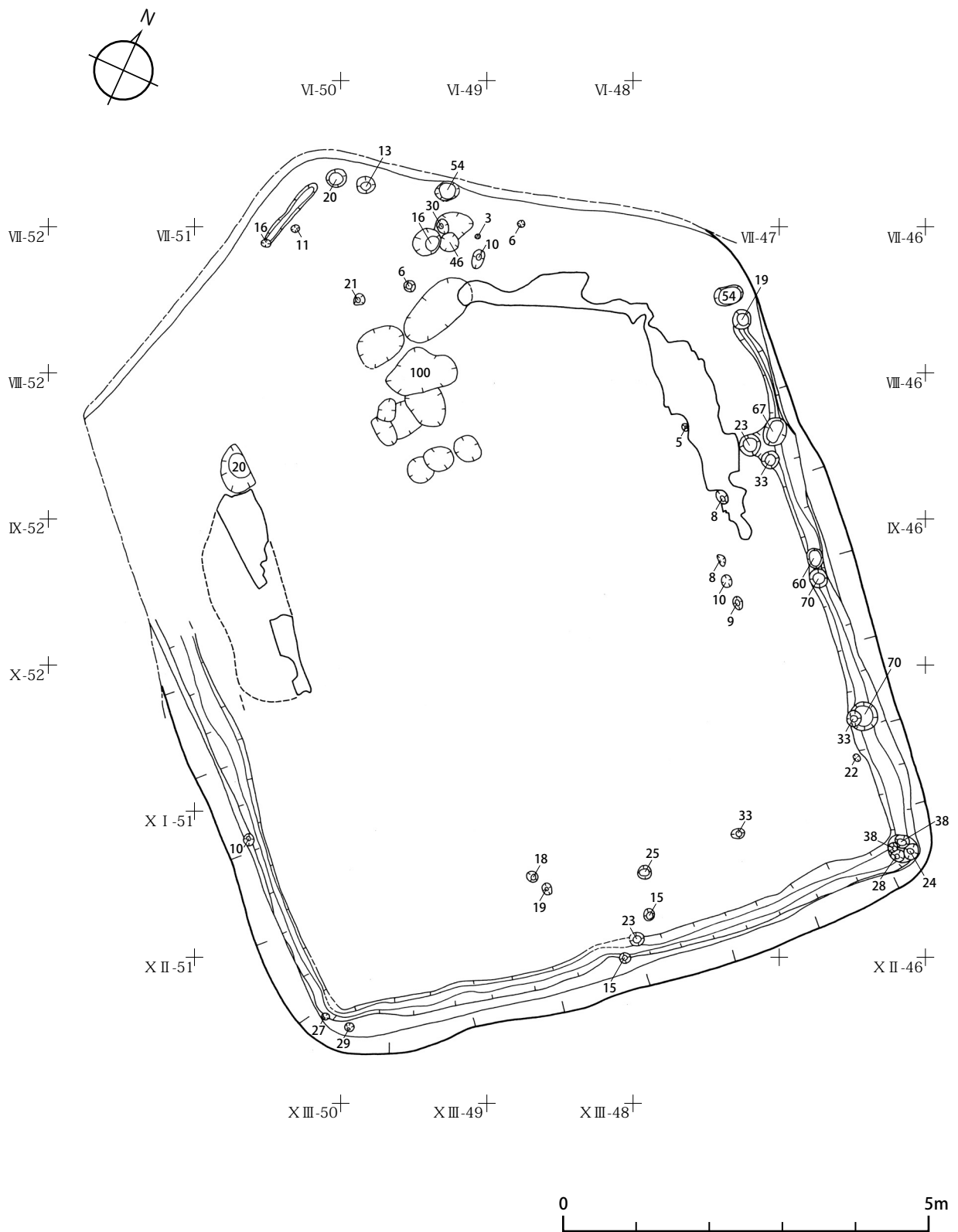
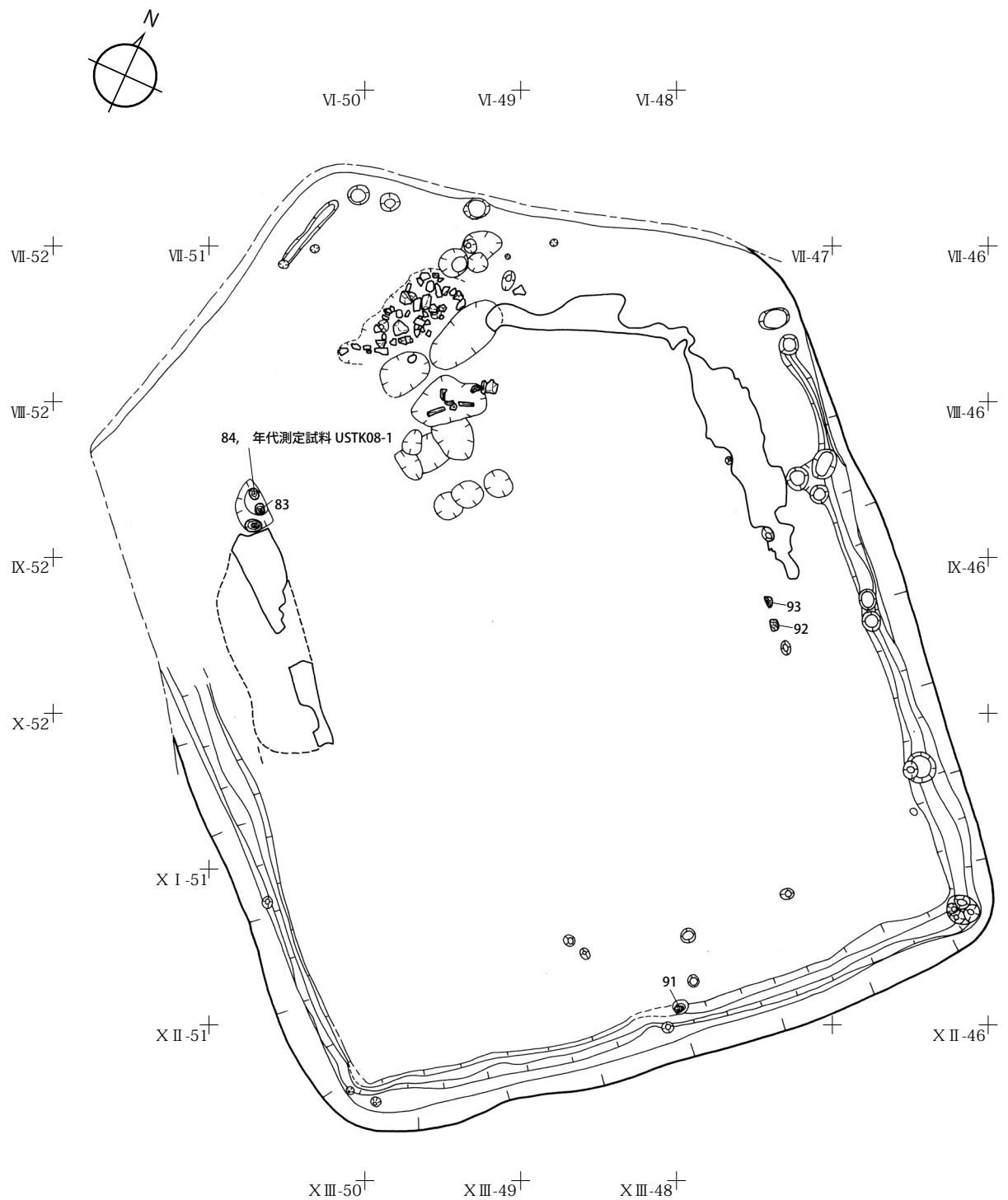


Fig. 64 8号竖穴（古段階）柱穴の深さ（床面から-cm）



番号は樹種同定した炭化材のNo. (第三章第八節 Table2 参照)  
 年代測定試料は第三章第十一節を参照



Fig. 65 8号竖穴(古段階)の炭化材等出土状況

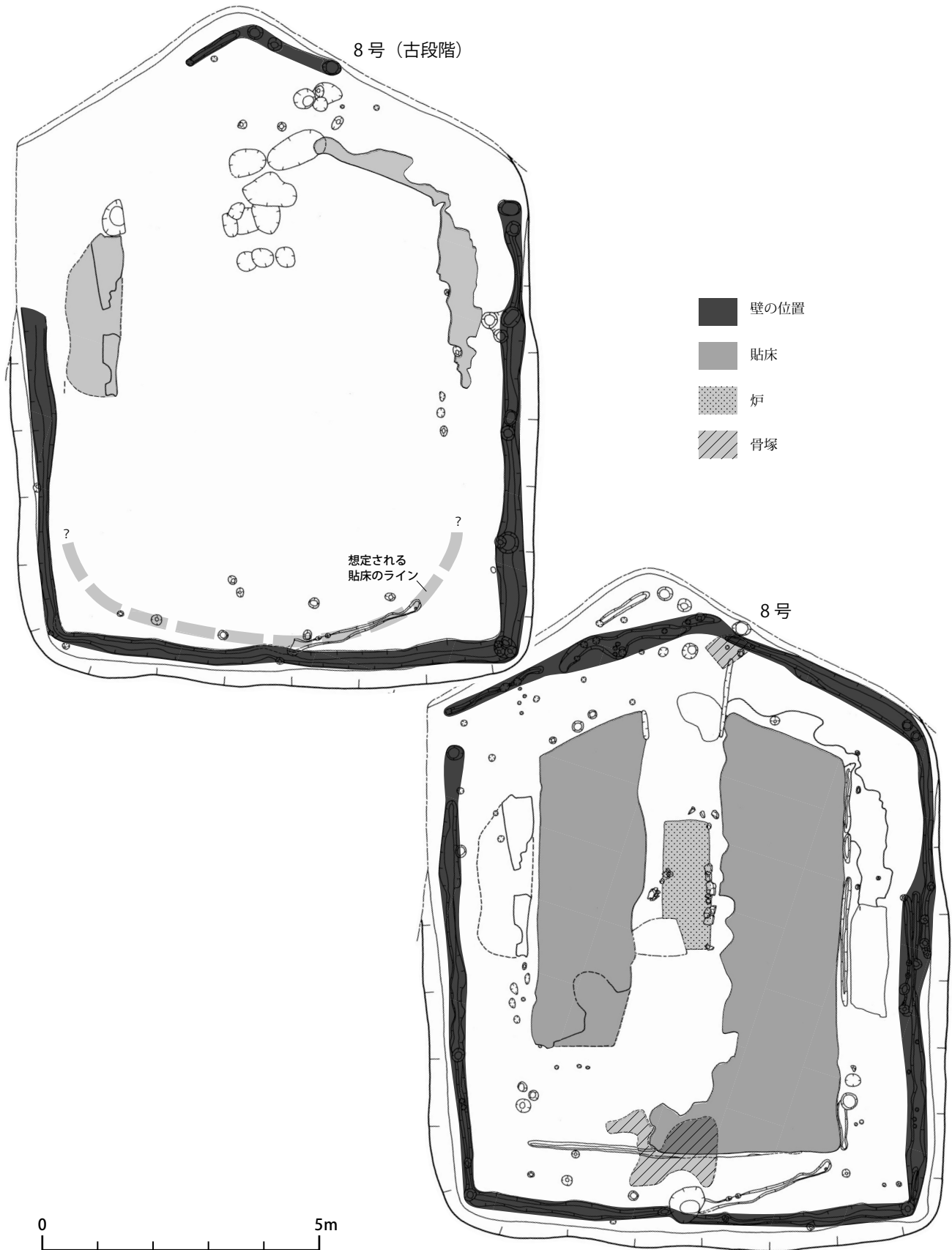


Fig. 66 8号竪穴の変遷過程

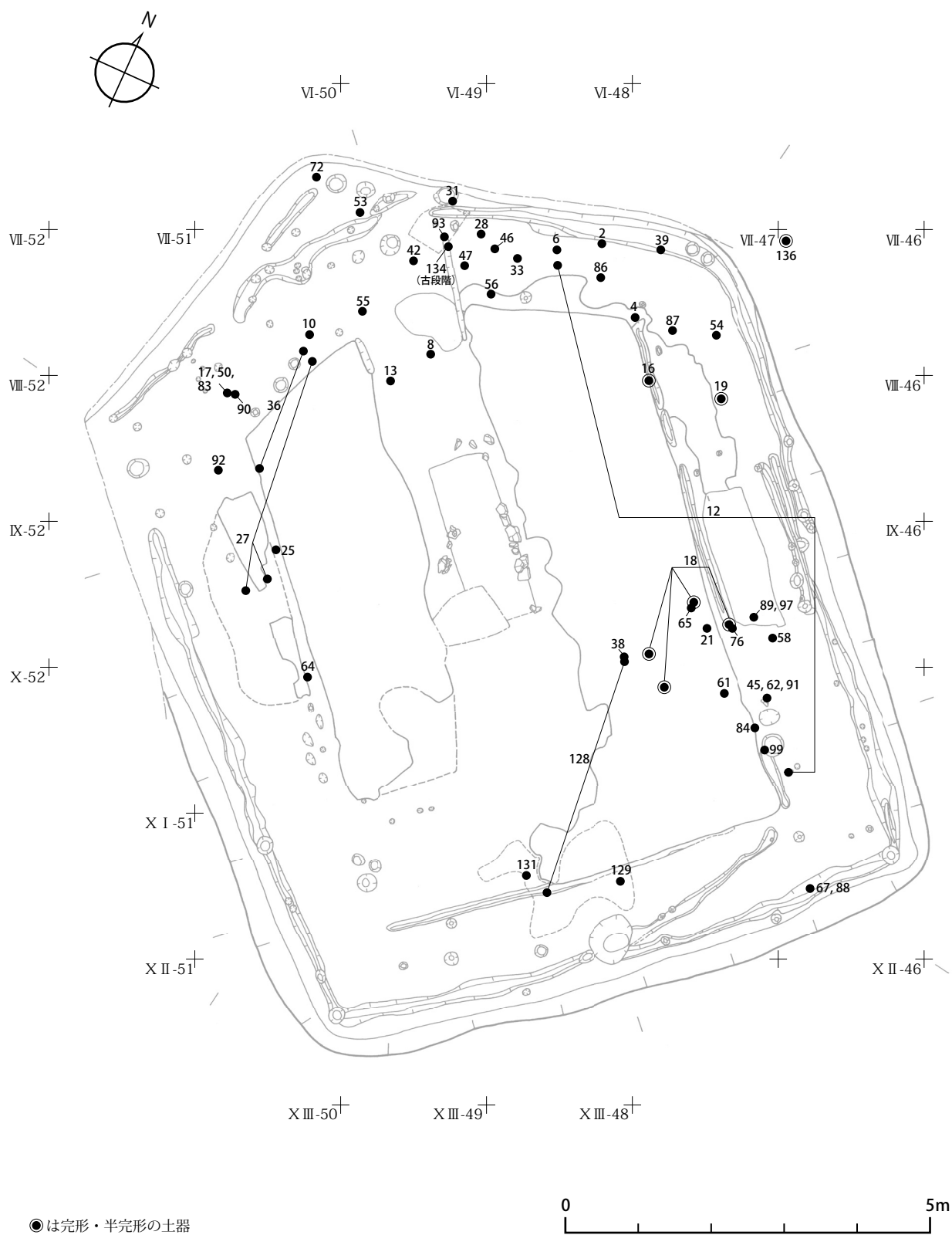


Fig. 67 8号竪穴床面・住居外出土土器分布図

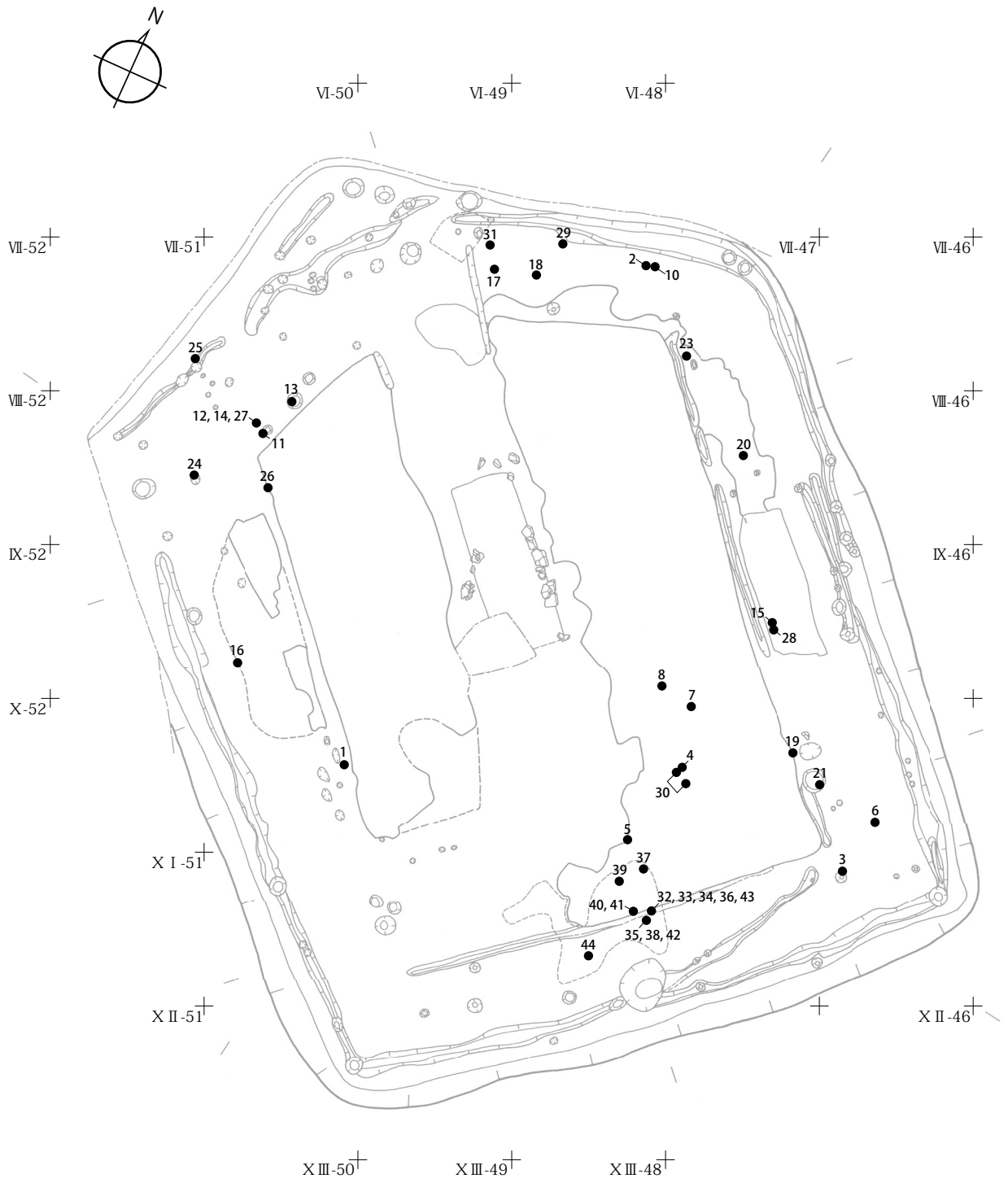


Fig. 68 8号竖穴床面出土石器分布图



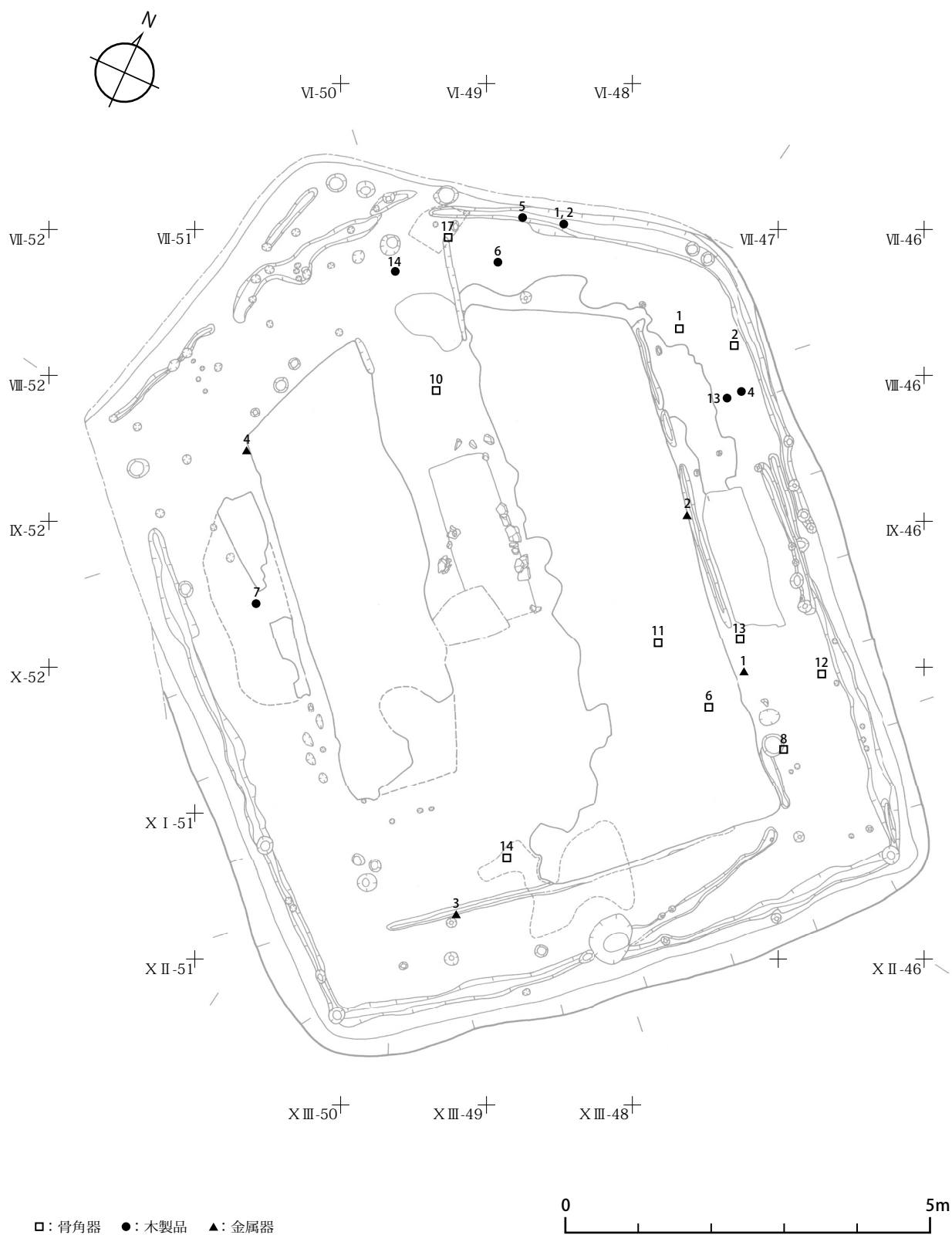


Fig. 69 8号竖穴床面出土遺物分布図（土器・石器以外）

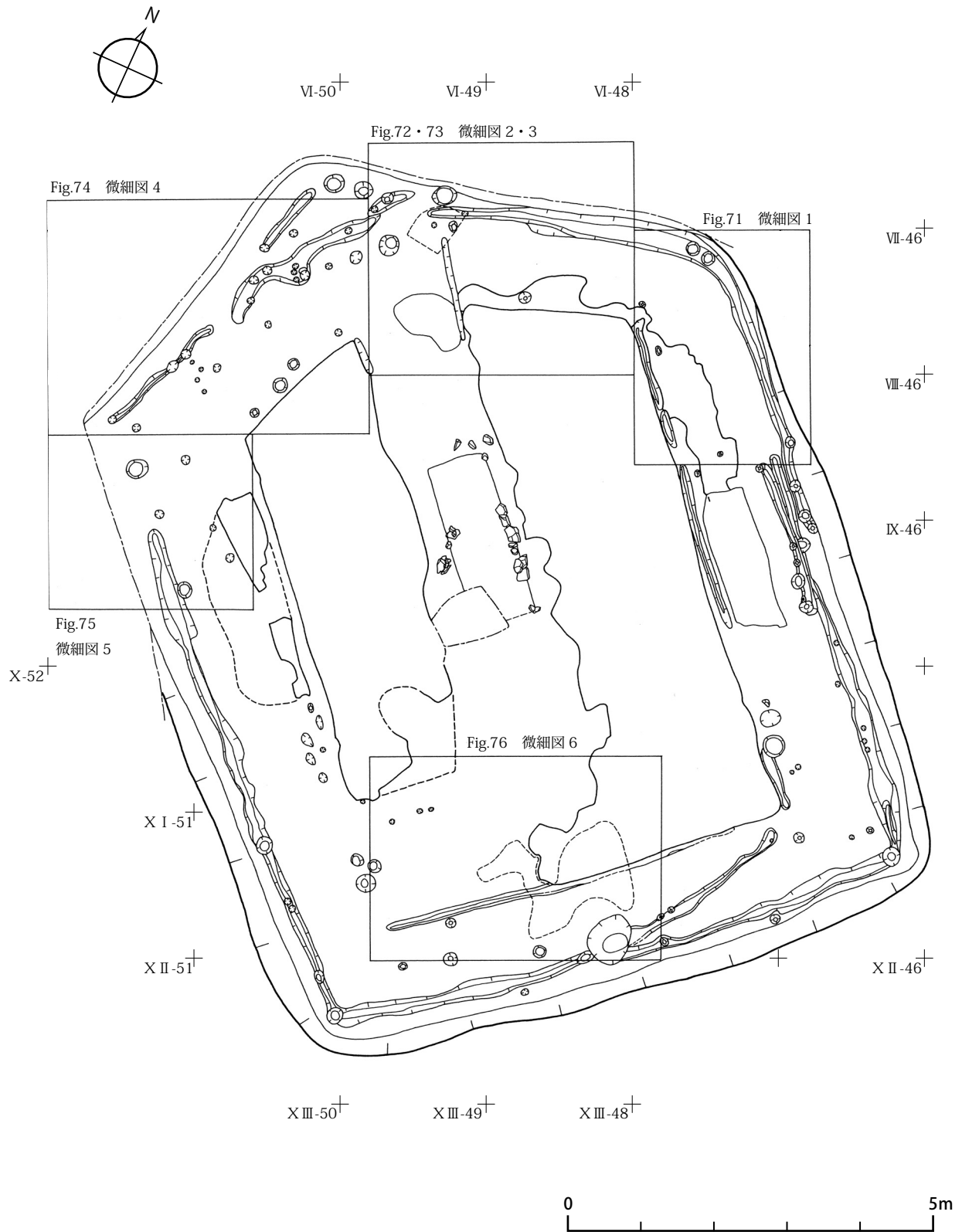
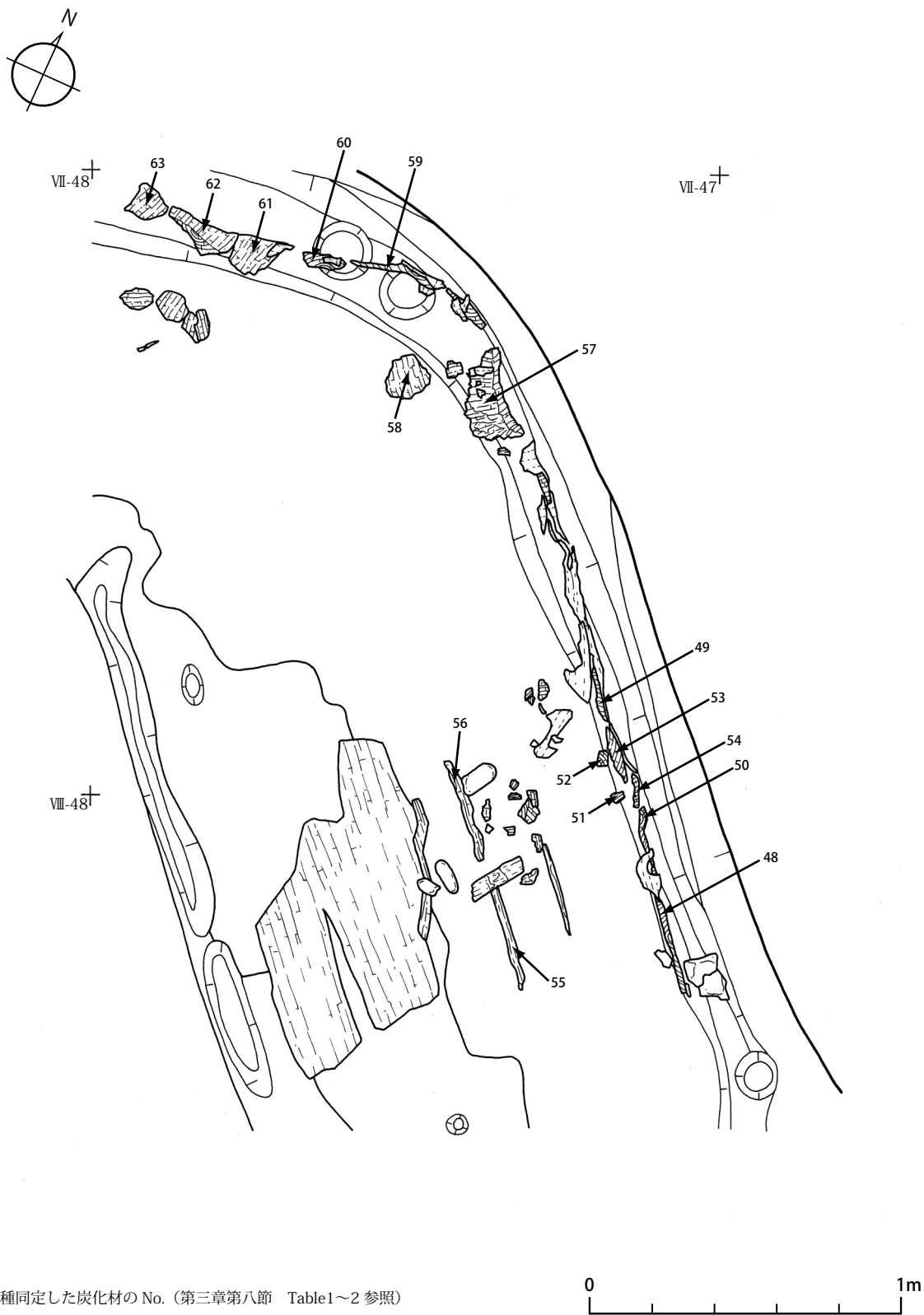
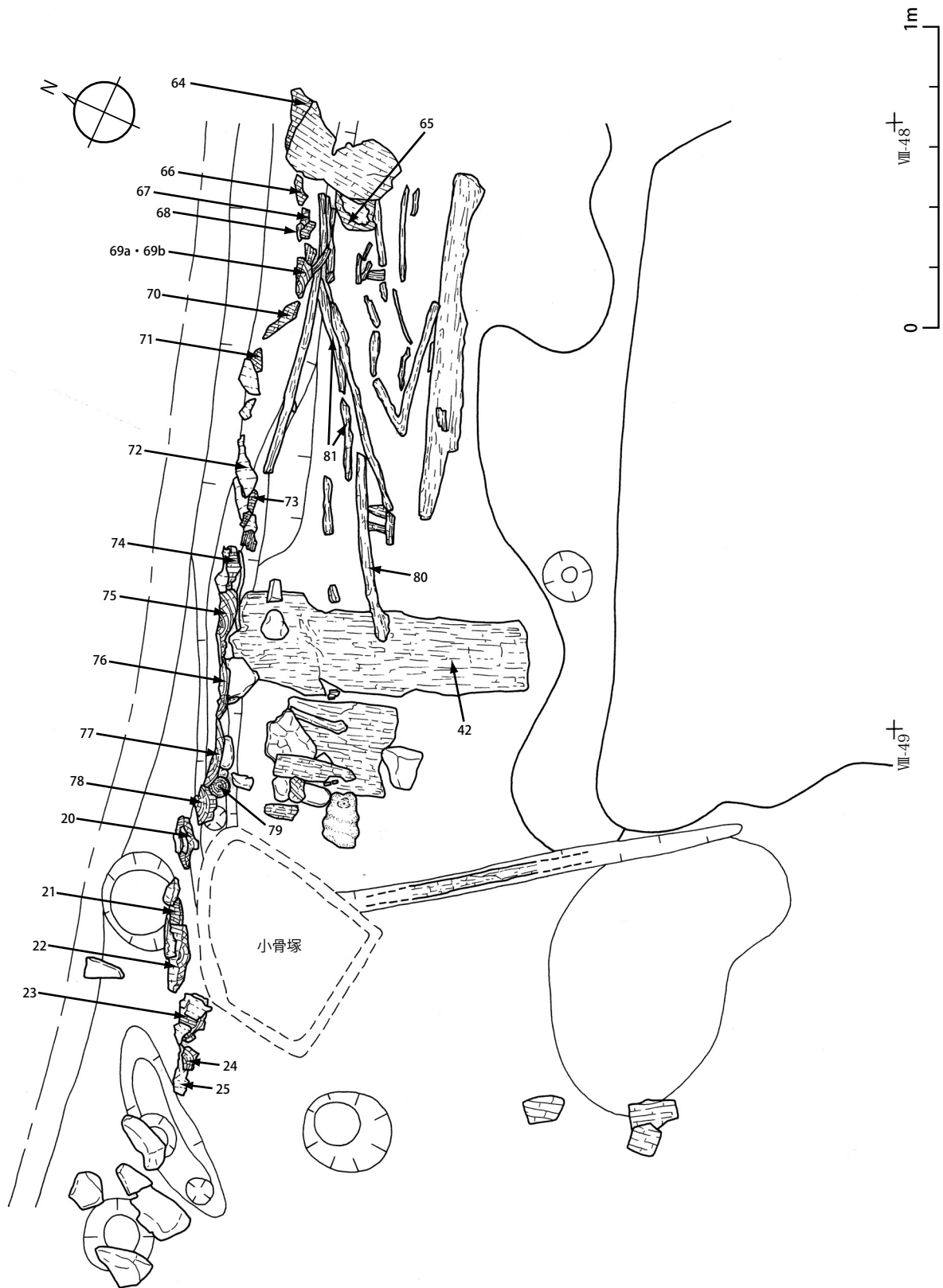


Fig. 70 8号竖穴床面の遺物等集中箇所



番号は樹種同定した炭化材の No. (第三章第八節 Table1~2 参照)

Fig. 71 8号竖穴床面の微細図1 (北東隅)



番号は樹種同定した炭化材のNo. (第三章第八節 Table1~2 参照)

Fig. 72 8号竖穴床面の微細図2 (開口部壁際東部)



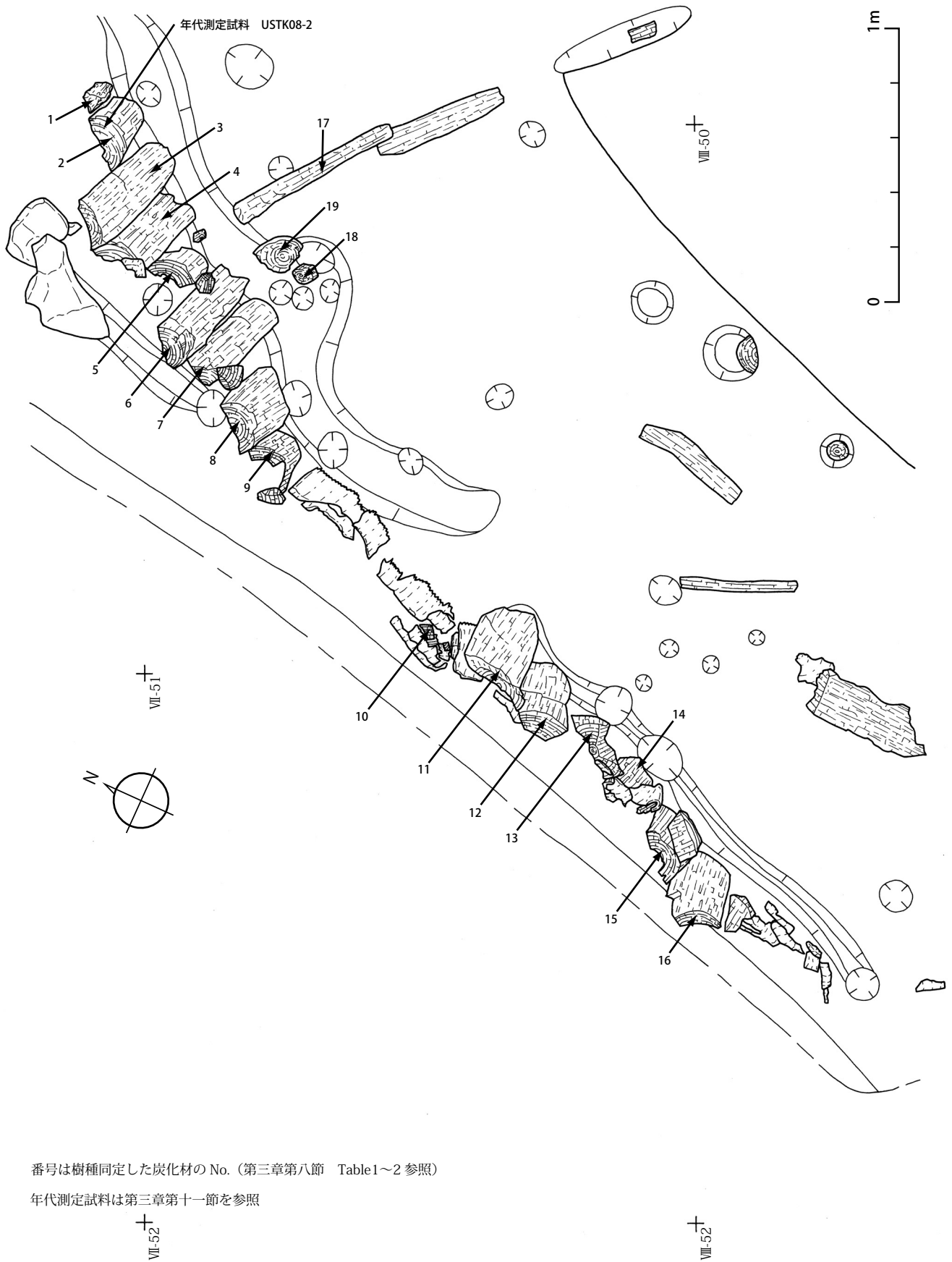
Fig. 73 8号竪穴床面の微細図3（開口部側の小骨塚）

## 2 竪穴住居

### 2-1 建て替えの概要

8号竪穴（Fig.59・口絵 Front2-1）でも貼床や壁を更新するといった住居の改築が最低1回は行われていたことが確認されたが、この改築は7号・9号・10号にみられた建て替えとは様相がやや異なり、壁の平面的な位置や住居の面積を大きく変更するものではなかった。具体的には、壁のごく一部を縮小するとともにほぼ同じ位置のわずかに上層に再構築し、貼床は縮小して作り直し、古い床面よりわずかに上層に新しい生活面を形成している。以上の相違点を重視し、8号竪穴の改築については他の竪穴にみられる「建て替え」とは異なる性格のものとして扱うこととし、以下、8号竪穴の新しい段階を8号竪穴、古い段階を8号竪穴（古段階）として記述する（Fig.66）。

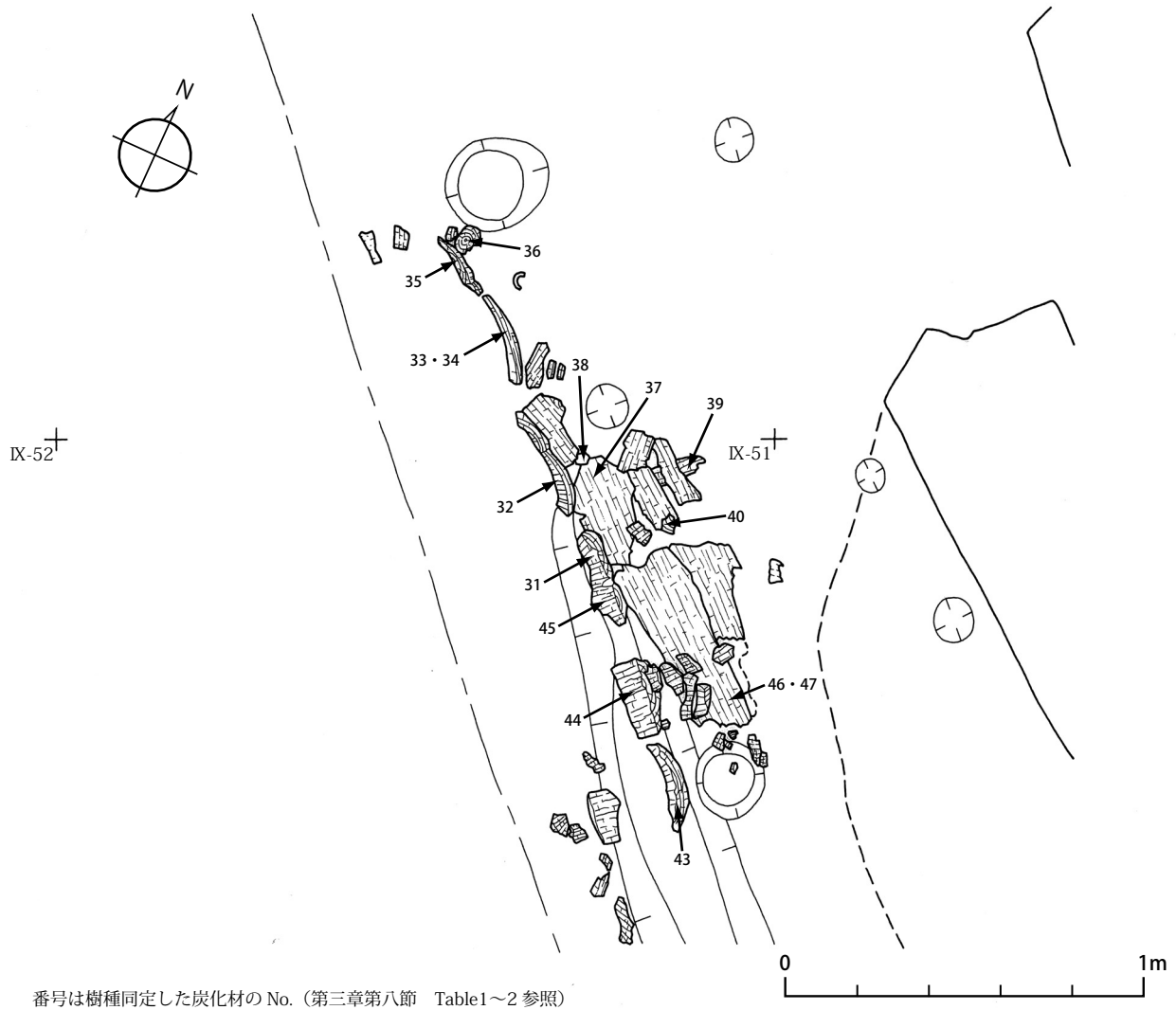
8号竪穴も廃絶時に火を受けていたことは明らかであった。8号竪穴（古段階）についても火を受けたような痕跡が一部で確認されたものの、全体として炭化材や焼土などはほとんど遺存しておらず、焼失か否かは確言できない状況であった。



番号は樹種同定した炭化材のNo. (第三章第八節 Table1~2 参照)

年代測定試料は第三章第十一節を参照

Fig. 74 8号竖穴床面の微細図4 (開口部壁際西部)



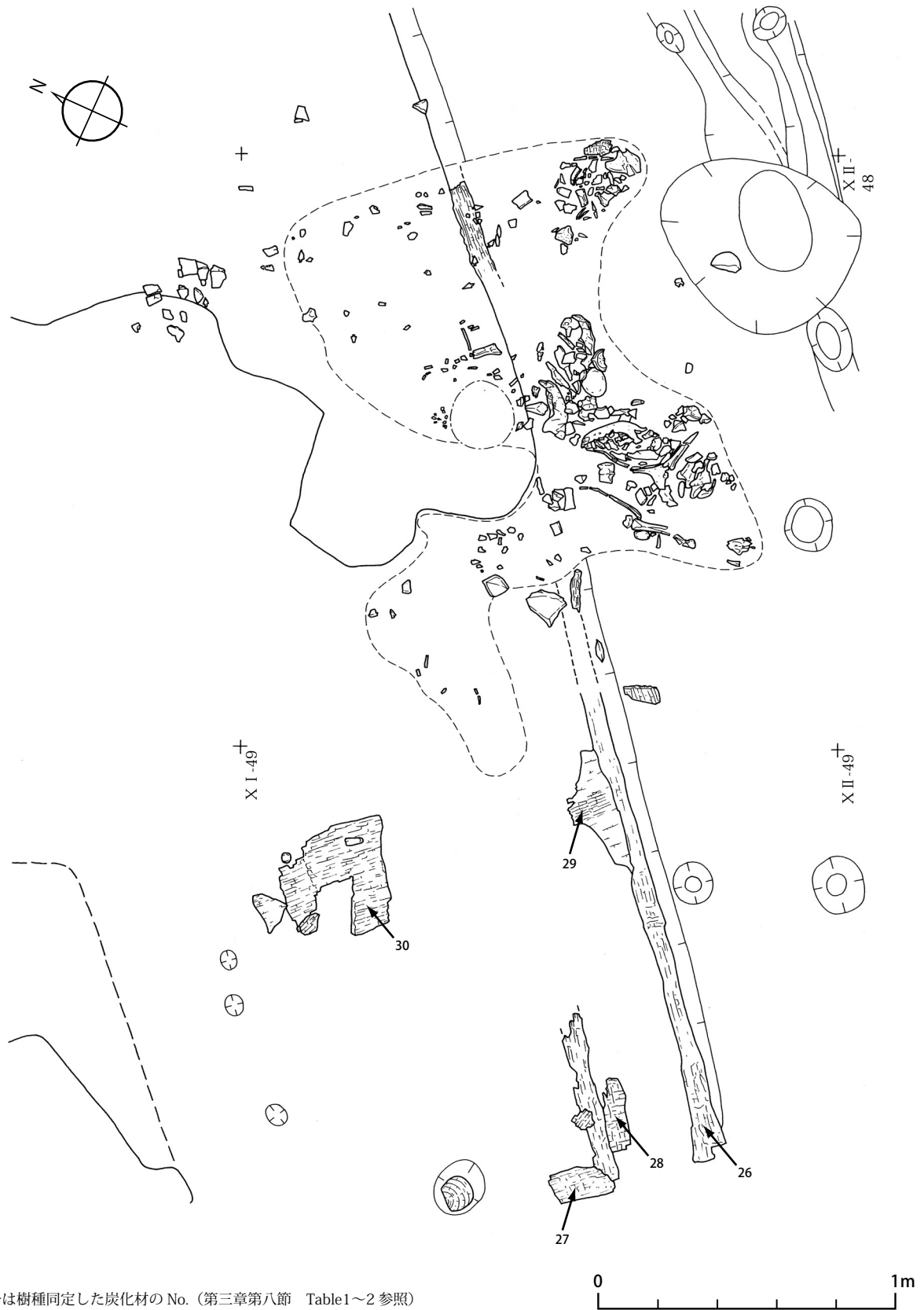
番号は樹種同定した炭化材のNo. (第三章第八節 Table1~2 参照)

Fig. 75 8号竪穴床面の微細図5 (西壁際北部)

## 2-2 8号竪穴

8号竪穴 (Fig.59) の平面形は、北西部が崖に接しているため、北西部の上端ラインや西側コーナー部の下端ラインに不明の部分があるが、貼床開口部方向が張り出した五角形を呈している。ただし8号竪穴の北西部の壁は、遺存していた炭化材の位置からすると五角形の頂点よりやや内側の周溝内に設置されていたと考えられる (Fig.66 下の壁の位置を参照)。よって8号竪穴の壁の下端での長軸の長さは推定で約11.2m、短軸は8.8mで、長軸は北西-南東方向である。

柱穴は、長軸の南東端に大型で深い柱穴が確認された。主柱穴であろう。長軸の北西端にも主柱穴と思われるピット (Fig.61 で深さ-36cm となっているもの) があるが、それほど大型ではない。これら



番号は樹種同定した炭化材のNo. (第三章第八節 Table1~2 参照)

Fig. 76 8号竖穴床面の微細図6 (骨塚)



の支柱穴以外にも柱穴が住居コーナー部分や壁際、貼床の周囲を中心に多数の柱穴が確認されている。これらの柱穴は壁を支える構造材やベンチ状遺構に関連するものが多いとみられる。柱穴のなかに炭化した柱材が遺存する例も少数あった (Fig.62)。

住居の壁の構造は、住居の北西側でのみ確認できた (Fig.71、Fig.72、Fig.74、Fig.75、PL.23-1・2、PL.24-1・2)。基本的には7号竪穴の壁と同じで、壁面に樹皮をあて、厚さ約3cmの板材(丸太の外皮部分を用いる例が多い。外皮部分が内側に向けられている)を縦に並べて壁とし、それらの壁を横方向の材と丸太の立柱で押さえる構造である。壁に接した竪穴内部には、幅30cm～40cmの板材が床面に接するように置かれている部分があった (Fig.72、Fig.75)。7号竪穴と同様のベンチ状施設と解釈できそうな部分もあるが、この板材は壁に平行する部分と直行する部分とがあり、また床面に板材が直接接している部分もあることから、一部はベンチ状施設とは異なる構造物である可能性も考えられた。

8号竪穴の貼床は、一見「ニ」の字形のようにも見えるが、これは南隅の部分が欠落したためで、この欠落した部分の一部には板材が敷かれていた痕跡が認められた。貼床の周囲をめぐる周溝の形状とあわせて考えると、粘土と板張りを組み合わせて「コ」の字形の貼床がつくられていたものとみられる。この貼床の周囲には細い周溝があり、部分的に板状の炭化材が残存していた (Fig.62)。7号竪穴などと同様に、貼床の縁には木柵状の囲いがあったと思われる。

この「コ」の字形の貼床の外側にも貼床が、特に西側でははっきりと確認された。外側・内側の貼床の間には狭い溝が切られていたため、外側が古い、すなわち貼床の改変(縮小)があったと判断した。ただし新旧の貼床の標高にほとんど差はない。これらの古い貼床については8号竪穴(古段階)の項で後述する。この部分の古い貼床の南側では板状の炭化材の痕跡が床面に接して確認されている (Fig.59、Fig.62)。この部分の床面に板貼りがなされていたことを示すものと考えられるが、これは古段階の竪穴に伴うというよりも、遺存状況からみて新しい段階の竪穴で使用されていたと考える方が自然であろう。なお、Fig.60のc-dラインの6層に含まれていた貼床の破片は8号竪穴の構築時に破壊された古い貼床の破片と考えられる。

炉は住居中央部で検出された。南側の一部が攪乱坑によって失われている。長軸に平行して礫による石組みがみられ、北西部の縁では木柵とみられる炭化材が残っていた (Fig.62)。石組みと木柵が併用されていたようである。

骨塚は南東側の奥壁と、反対側の、貼床開口部のやや東よりの壁際の2箇所を確認された。奥壁の骨塚は支柱穴の前面から貼床までの間を中心に広がっており、一部は貼床上まで流れ込んでいた (Fig.76、PL.25-1・2、PL.26-1)。骨塚の下面には7号竪穴で認められたような祭壇状の施設は認められなかった。床面上に直接動物遺体等を置くかたちで骨塚が形成されたとみられる。出土遺物にはヒグマの頭骨を含む種々の動物遺体、土器 (Fig.85)、石鏃等の石器 (Fig.90)、骨角器 (Fig.93-14～16) が認められた。一方、貼床開口部の骨塚 (Fig.59の「小骨塚」) は、50×60cmほどの範囲にヒグマの四肢骨とみられる動物遺体が集積された小規模なものである (Fig.72、Fig.73、PL.26-2)。この「小骨塚」は四辺を囲むようなかたちで炭化材の痕跡が残っており (Fig.72の点線部分)、木柵で囲まれた構造であったと考えられる。

「小骨塚」からは前述の四肢骨とみられる動物遺体のほか、オホーツク土器の底部破片 (Fig.83-93)、掘具とみられる骨器 (Fig.93-17) が出土している。なお、これら奥壁の骨塚および「小骨塚」から出土した動物遺体については現在分析中であり、報告は別の機会に譲ることとする。

8号竪穴の床面からは土器 (Fig.79 ~ Fig.84)、石器 (Fig.88・Fig.89)、骨角器 (Fig.92)、木製品 (後述の遺物の項を参照)、鉄器 (Fig.96-1 ~ 4) など、多数の遺物が出土した。主なものについて平面上の出土位置を示したのが Fig.67 ~ Fig.69 である。土器・石器・その他遺物とも貼床より外側の区域を中心に出土しているが、南東隅付近では出土が少ない傾向が認められた。

### 2-3 8号竪穴 (古段階)

以上の8号竪穴が、それ以前にあった古い段階の竪穴住居を改築して建てられたことを示す痕跡が確認されている。最も顕著な証拠は古い貼床で、8号竪穴の貼床の外側、西側に接する部分では古い貼床が確認されている。Fig.59の「古段階の貼床」とした箇所がそれで、実線で囲ったところは貼床の遺存状態が良好な部分、点線部はぼろぼろになった粘土塊が痕跡的に残っていた部分である。また、8号竪穴の貼床の北東側に接する部分でも粘土塊ないしは焼土が広範囲に確認されたが、これらの一部は古い貼床に相当すると思われる。竪穴の南東部、奥壁側では古い貼床の痕跡は確認できなかったが、奥壁側の支柱穴から斜めに伸びている周溝は、その位置や形状から判断すると古い貼床の周囲に設けられていた周溝である可能性が考えられよう (Fig.66 上)。

一方、竪穴の壁際では、8号竪穴の周溝のわずかに下層、ほぼ重複する位置で古い時期のものとみられる周溝の存在が確認された (Fig.63)。これらの古い周溝は、8号竪穴 (古段階) の壁とほぼ同じ位置のわずかに上層に8号竪穴の壁が再構築されたことを示している。また、竪穴の北西部、五角形の頂点付近では、8号竪穴の壁とみられる炭化材列のさらに外側に周溝と柱穴が検出されている (Fig.66 上の濃い網掛け部分)。この部分の周溝と柱穴もおそらく8号竪穴 (古段階) に伴うもので、8号竪穴の壁がこの部分では古段階の住居のやや内側に建て替えられたことを示している。

さらに8号竪穴の床面を精査していたところ、住居の長軸上、炉の北西側から北側の支柱穴までの間で、8号竪穴の床面よりやや下層に礫群とピット群が確認された (Fig.65、Fig.78、PL.27-1)。礫群は約1.8m×0.7mの範囲に角礫を中心とした礫が集積されたもので、ピットを伴うようであったが、上面確認のみに止めて掘り下げを行わなかったためピットの有無についてははっきりしなかった。ピット群については、中央にあるやや大型の1基についてのみ掘り下げを行い、土坑内で炭化材を検出するとともに (Fig.78、PL.27-2)、深さが約1mとかなり深いものであることを確認した。これらの礫群とピット群はその検出面からみて8号竪穴より古く、ちょうど貼床の開口部に位置する点から判断して8号竪穴 (古段階) に伴う遺構と考えたが、これら遺構群の機能は不明とせざるを得ず、また時期も竪穴とは別の、より古い時期の遺構群である可能性もある。なお、これらの遺構群以外にも、柱穴と見られるピットが8号竪穴の床面もしくは貼床より下層からいくつか検出されており、それらのなかには柱材とみられる炭化材が遺存しているものもみられた (Fig.65)。

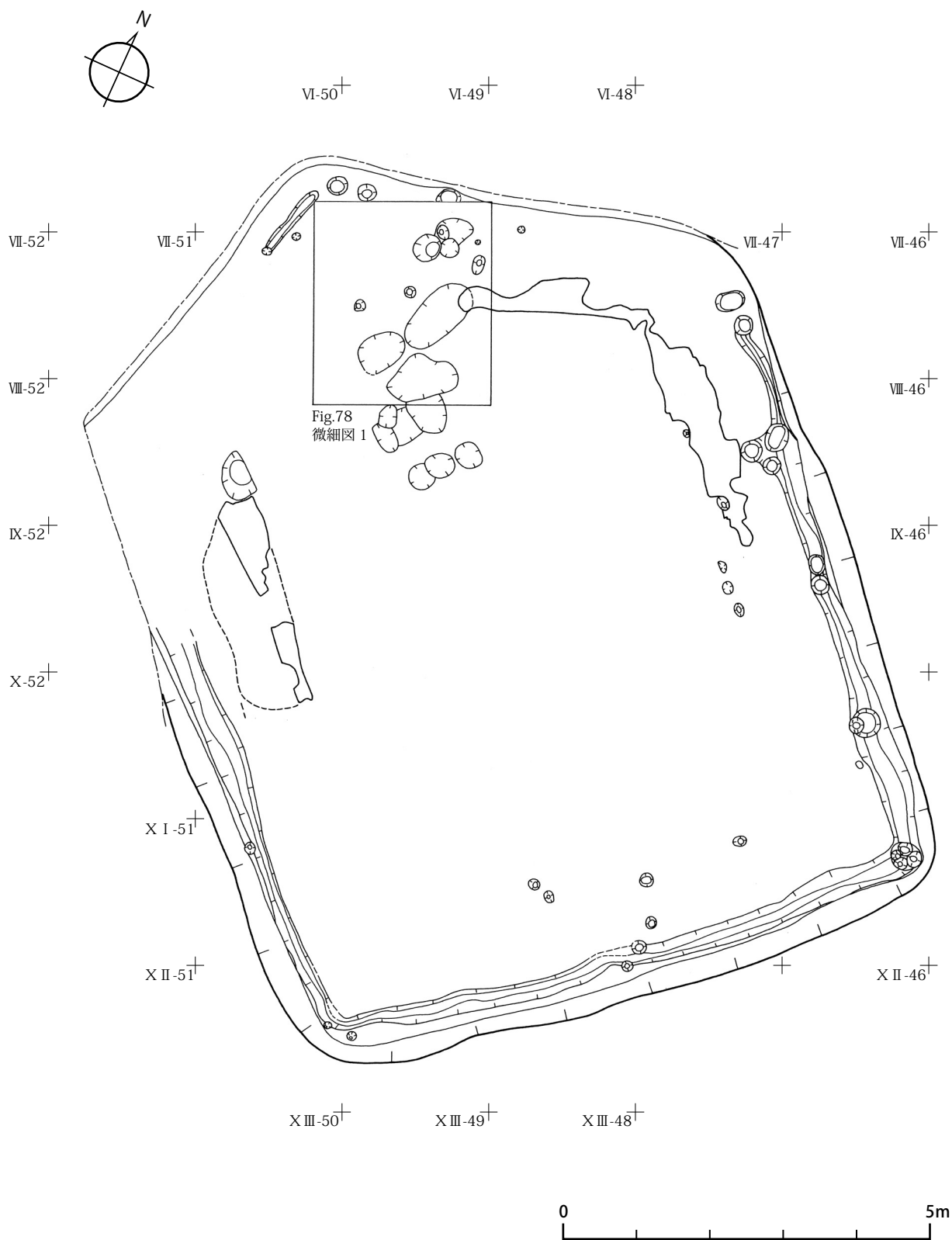


Fig. 77 8号竖穴（古段階）の遺物等集中箇所

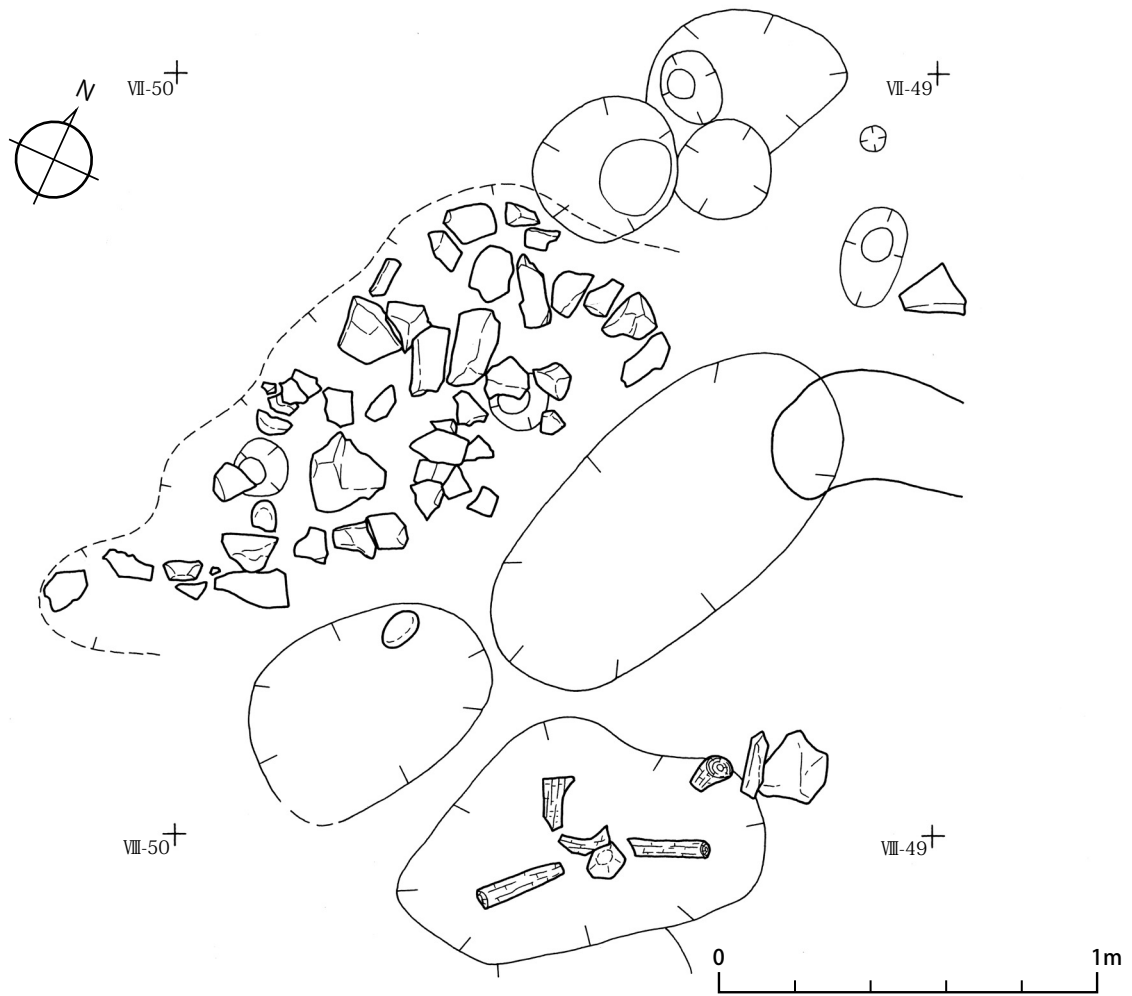


Fig. 78 8号竪穴（古段階）の微細図（貼床開口部周辺）

以上の調査所見から、8号竪穴より古い段階の8号竪穴（古段階）が存在したと判断した（Fig.63、Fig.66 上）。平面形は8号竪穴とほぼ同じであるが開口部側の頂点がより強く張り出したかたちをしており、壁の下端部での長軸の長さは8号竪穴よりわずかに長く推定で約11.5m、短軸は8号竪穴と同じ8.8m、長軸方向は8号竪穴と同じである。前述の8号竪穴を構築する際に貼床の平面プランが縮小され、建て替えが行われたとみられるが、その際には外壁の位置を大きく改変することはせず、開口部側の頂点付近のみをわずかに縮小して改築がおこなわれたようである。炉や骨塚については、古い段階でのみ使用されていたと考えられるものは確認されていない。奥壁側の支柱穴も同様である。前述の8号竪穴で確認された炉や骨塚が古い段階から継続的に使用されていたと考えるのが妥当であろうが、確実な証

抛はなく確言できない。なお、8号竪穴（古段階）の廃絶時に竪穴が火を受けていたか否かであるが、古段階のものとみられる柱穴内に炭化材が遺存していた点からすると、他の竪穴の建て替え時と同様にこの古段階の竪穴も焼かれていた可能性がある。しかし壁際の周溝の状況をみると、古い段階の周溝では被熱や炭化した壁材等の痕跡が明確には確認できなかったため、古段階の竪穴全体が火を受けていたと確言することはできない。古段階の廃絶時ではなく、新しい段階の廃絶時に一緒に火を受けた結果として炭化材が残った可能性もある。

この8号竪穴（古段階）に確実に伴って出土した遺物は少ないが、オホーツク文化貼付文期の土器片（Fig.86）と石鏃（Fig.91）が出土している。

（熊木俊朗）

### 3 遺物

#### 3-1 土器

文様を有するオホーツク土器については第二章第五節に属性表を掲載したので、文様の詳細ならびに破片同士の接合関係についてはそちらを参照されたい。

##### ① 8号床面出土（Fig.79～Fig.84）

1～99はオホーツク土器。1～29・31～45、52～81は貼付文系の文様、46は沈線文系と貼付文系の両方の文様、82は沈線文系の文様、30・47は刻文系と貼付文系の両方の文様、48は刻文系の文様をそれぞれ有する土器。49～51・83は遺存している部分については無文の土器。84～99は底部破片である。72は8号竪穴の「裏込め」の土に伴うと考えられたのでここに含めたが、むしろ古段階の竪穴に伴うものである可能性もある。

1～15は文様に3本以上を1単位とする貼付文を含む口縁部破片である。16～31は文様に2本1単位の貼付文を含む完形及び口縁部破片である。19はミニチュア土器で貼付文系の文様が施されていたように見えるが、文様が剥落しており詳細不明である。27と28は同一個体とみられる。30は口縁部肥厚帯の下縁に刻文を有している。31は口縁部が無文で、胴部に貼付文が施されている。32～45は文様が1本単独の貼付文で構成される口縁部破片である。46は貼付文と沈線文が併存しているように見えるが、口縁部下端の沈線文は貼付文が剥落した痕跡の可能性もある。47は口唇の外縁にやや太い刻文が施されており、その下部にボタン状貼付文と刻み目のある貼付文が施されている。48は口縁部がすぼまる器形になるようで、円形の刺突文が浅く施されている。51は口縁部もしくは頸部などに付されていた把手の破片のように思われるが確証はない。オホーツク土器ではない可能性もある。52～83は胴部破片もしくは口縁部が欠損した破片で、そのうち52～57は文様に3本以上を1単位とする貼付文、58～73は2本1単位の貼付文を含み、74～81は文様が1本単独の貼付文で構成されている。59には鱗状の意匠を持つ貼付文が付加されており、「鱗」の部分には4本の刻み、すなわち5本指の表現が施されている。82は沈線が2条施されている。83は無文の胴部破片。85の底部破片はI層出土の破片を

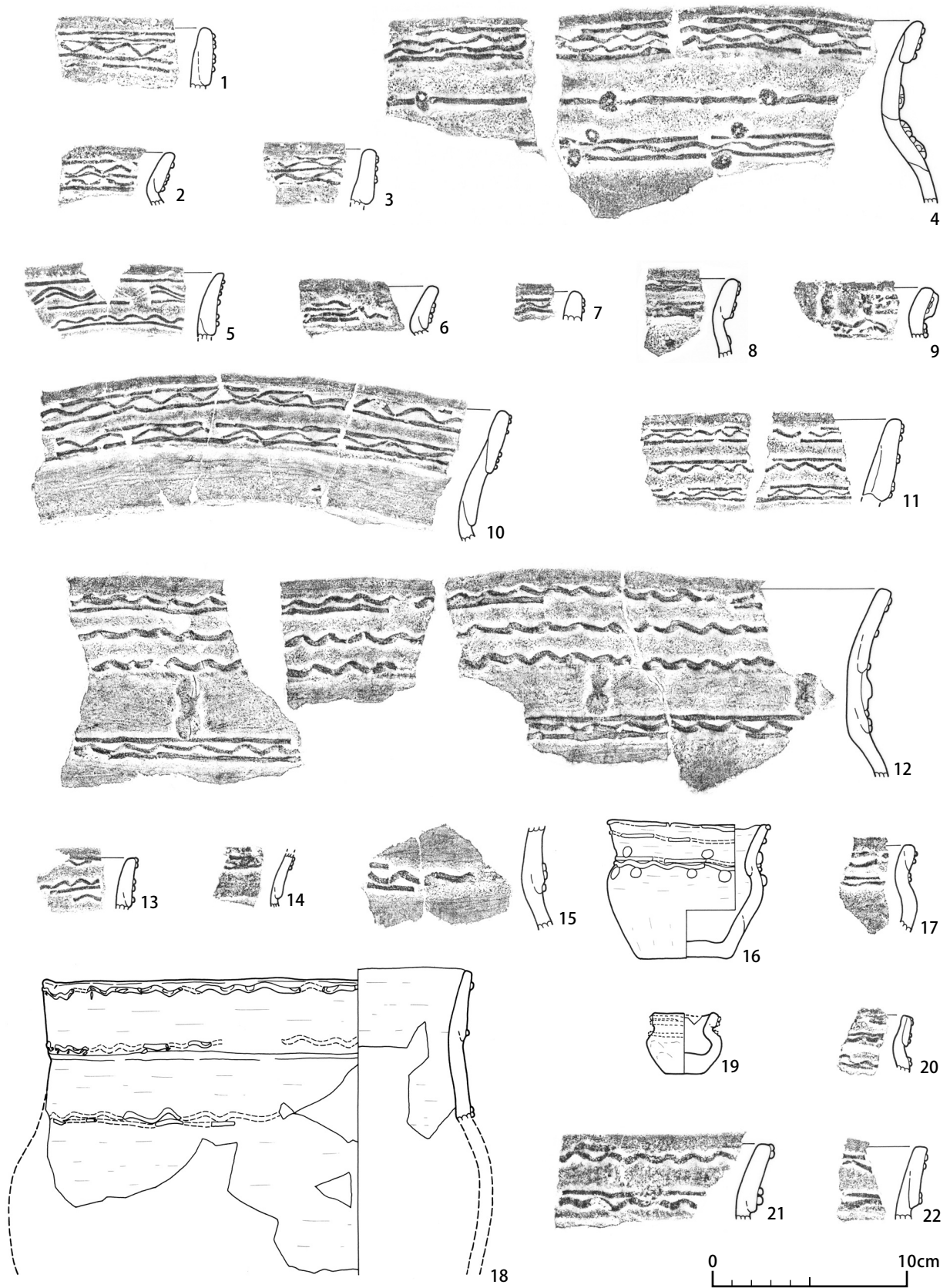


Fig. 79 8号竖穴床面出土の土器 1

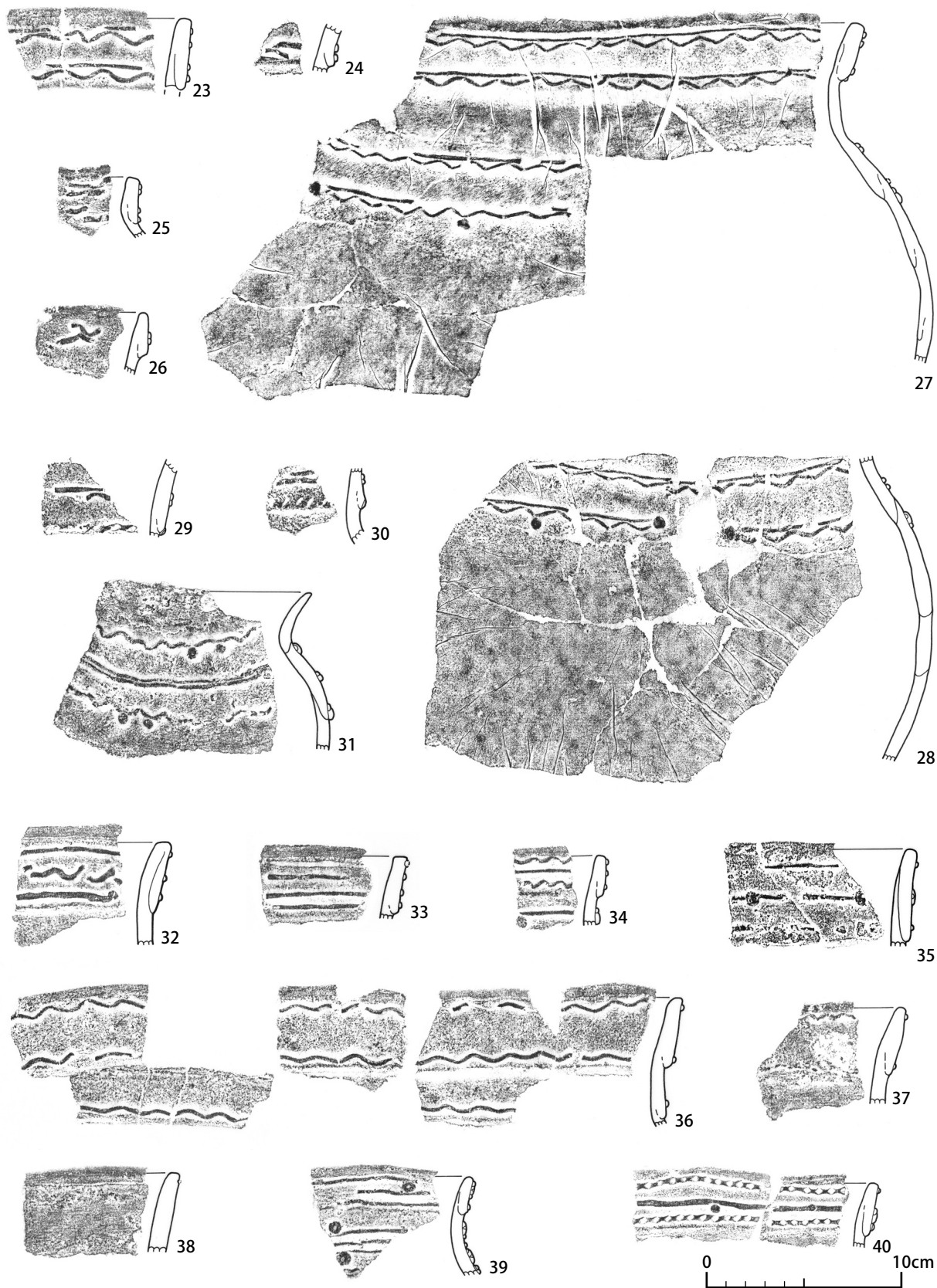


Fig. 80 8号竪穴床面出土の土器2

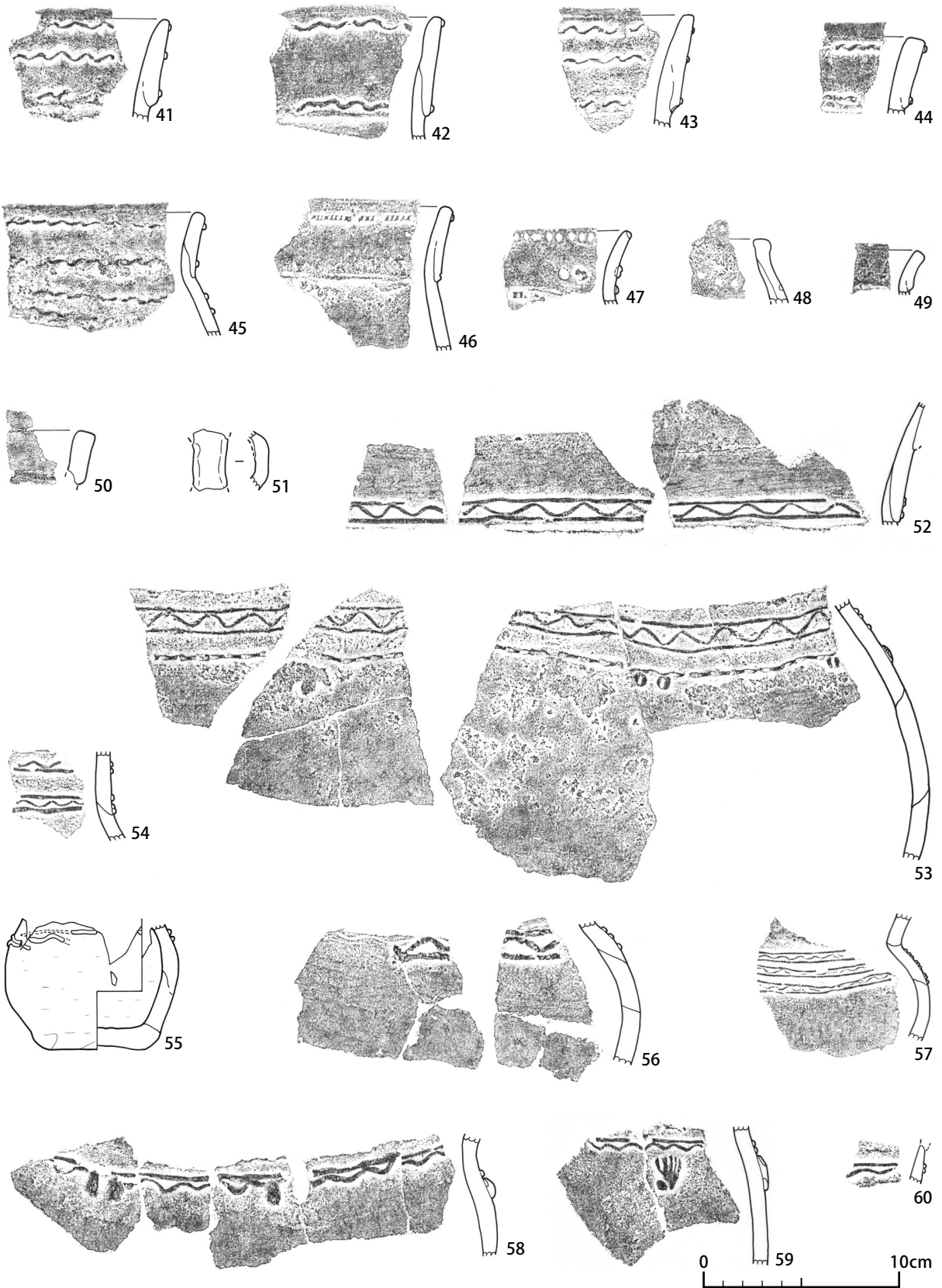


Fig. 81 8号竖穴床面出土の土器3



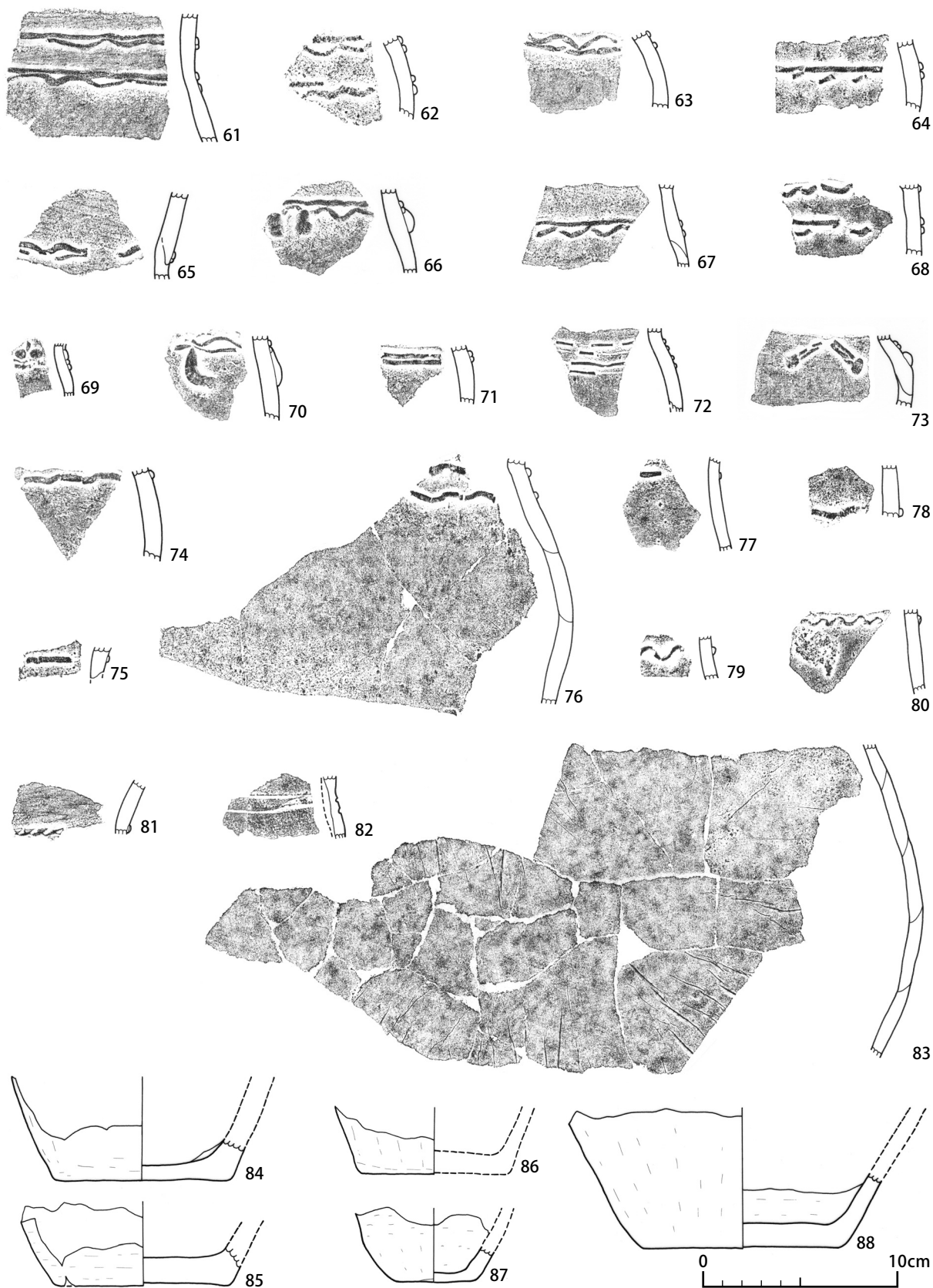


Fig. 82 8号竪穴床面出土の土器4

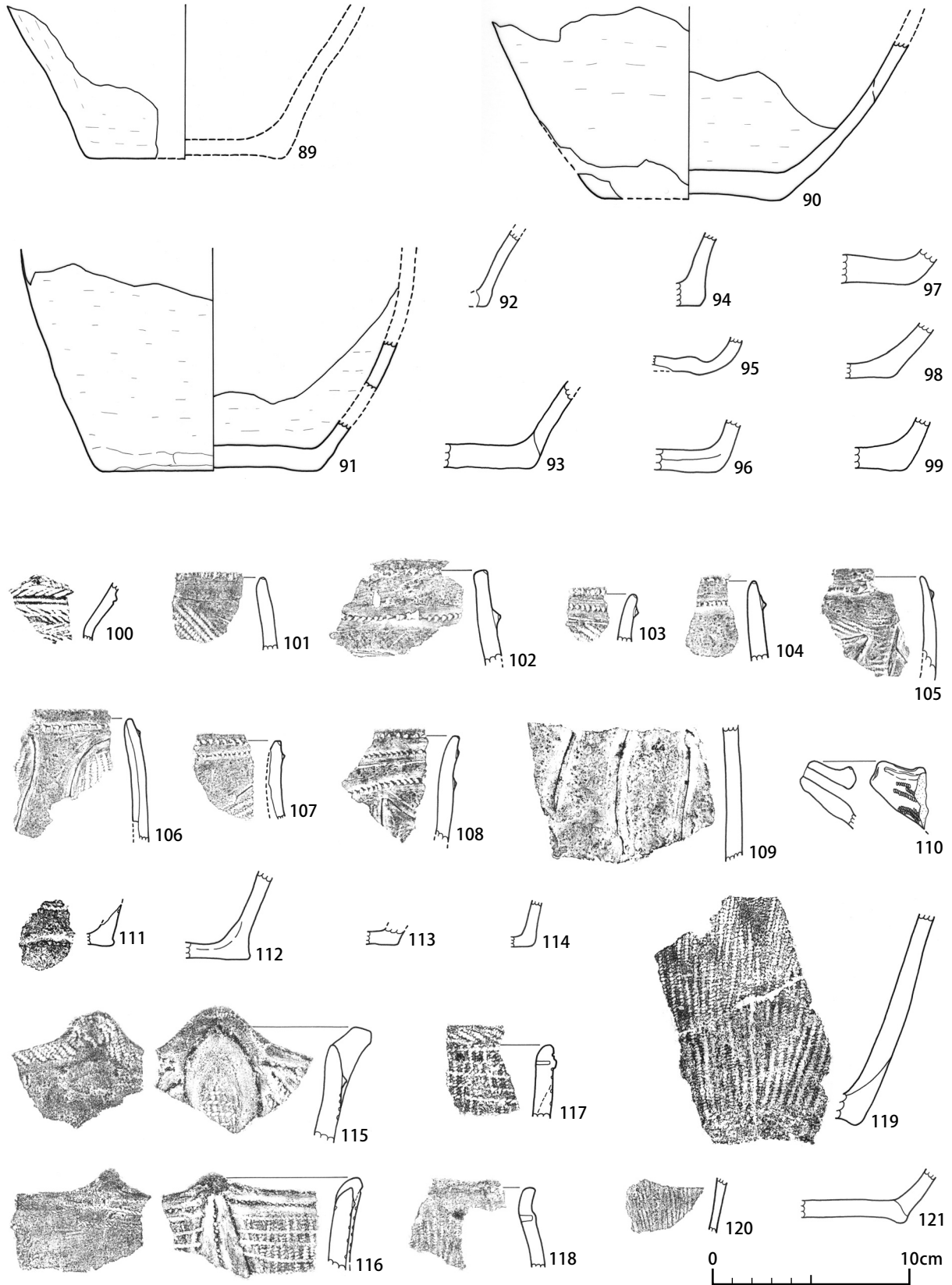


Fig. 83 8号竖穴床面出土の土器 5

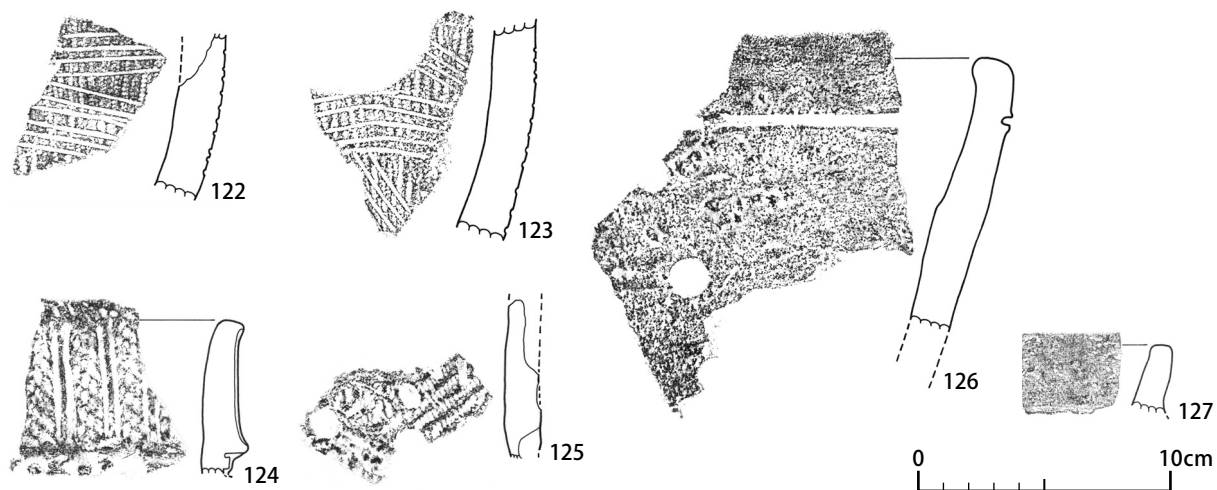


Fig. 84 8号竪穴床面出土の土器6

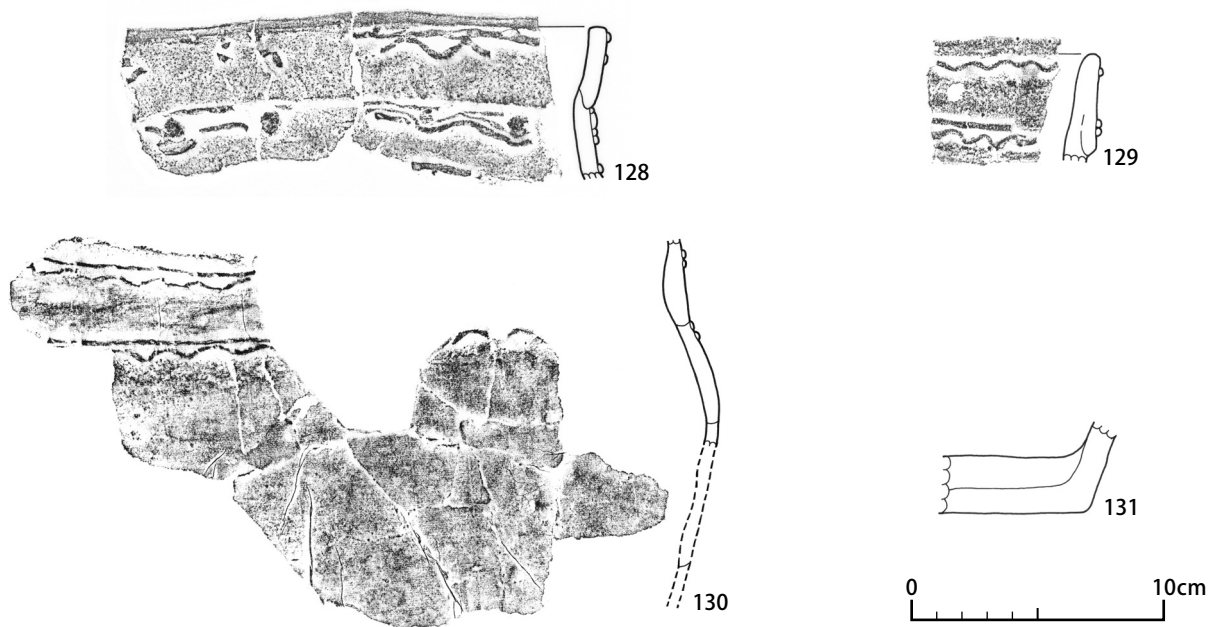


Fig. 85 8号竪穴骨塚出土の土器

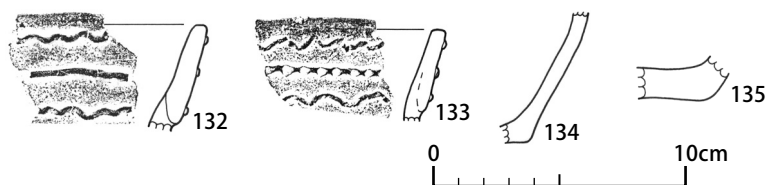


Fig. 86 8号竪穴（古段階）出土の土器

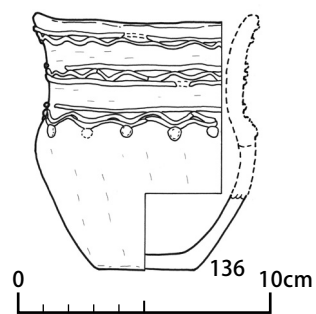


Fig. 87 8号竪穴住居外出土の土器

含む。88の底部破片はⅠ層出土およびⅡ層出土の破片を含む。93の底部破片は開口部側の「小骨塚」に伴って出土した。

100・120は擦文土器。100は口縁部破片とみられ、やや細い隆帯が横方向に巡っている。隆帯上には沈線が施され、隆帯の上下には短い沈線が矢羽状に施されている。宇田川編年中期～後期の擦文土器とみられる。120は胴部破片で、外面にはハケ目があり内面は黒色処理を受けている。

101～119・121は続縄文土器。101～110は後北C<sub>2</sub>・D式土器。110は注口土器の注口部である。111～114は底部破片で、器形等からすると後北C<sub>2</sub>・D式土器とみられる。115・116は宇津内Ⅱb式土器。117は宇津内Ⅱa式土器。118は元町2式もしくは宇津内Ⅱa式土器。119は縄文晩期末～続縄文前半期とみられる底部破片。121も同じ時期の底部破片と考えられるが確定はできなかった。

122～127は縄文土器。122・123は厚手で胎土に繊維が少量含まれる。地文はRLの縄文で、3～5本単位の沈線が施されている。縄文後期の土器とみられるが型式の同定は難しい。124は地文が複節RLRの縄文であるが、北筒式トコロ5類土器に含めてよいと思われる。胎土には繊維がわずかに含まれる。125は胎土に繊維を多く含み、OIの刺突文が施されている。北筒式トコロ6類土器であろう。126は厚手の土器で、胎土に繊維は含まれておらず、口縁部には沈線が巡っている。網走式土器とみられる。127はやや厚手で無文の土器で、これも網走式土器とみられるが確証はない。

#### ② 8号骨塚出土 (Fig.85)

128～131はオホーツク土器。128～130は貼付文系の文様を有する土器で、128は文様に3本以上を1単位とする貼付文を含む口縁部破片、129・130は文様に2本1単位の貼付文を含む口縁部破片と胴部破片である。131は底部破片。

#### ③ 8号(古段階)床面出土 (Fig.86)

132～135はオホーツク土器。132・133は貼付文系の文様を有する口縁部破片で、どちらも文様は1本単位の貼付文で構成されている。134・135は底部破片。なお前述のように、Fig.82-72の胴部破片もこの段階に伴っていた可能性がある。

#### ④ 8号竪穴住居外出土 (Fig.87)

136はオホーツク貼付文系土器で、文様には3本以上を1単位とする貼付文を含む。

(熊木俊朗)

### 3-2 石器

#### ① 8号床面出土 (Fig.88～Fig.89)

出土位置を記録した遺物(点取り遺物)は、石鏃20点、両面加工尖頭器5点、石製ナイフ・スクレイパー7点、楔形石器1点、石核2点、石斧1点、有溝砥石(矢柄研磨器)2点、石錘1点、凹石1点、剥片54点の計94点である。

#### 石鏃 (Fig.88-1～17)

いずれも黒曜石製であるが、4・7は被熱による表面変化が著しく、11～14は発泡し肥大化している。

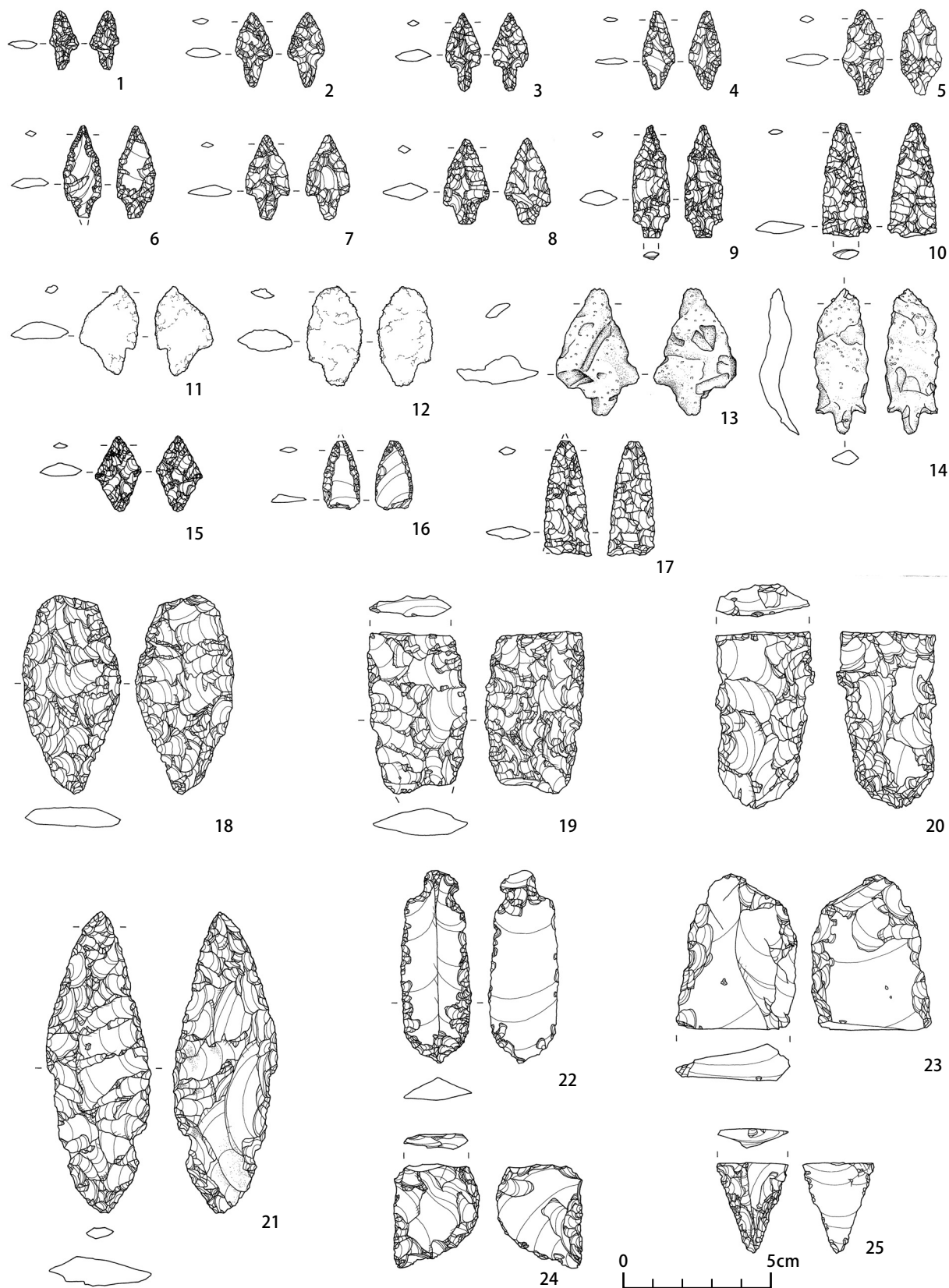


Fig. 88 8号竪穴床面出土の石器 1

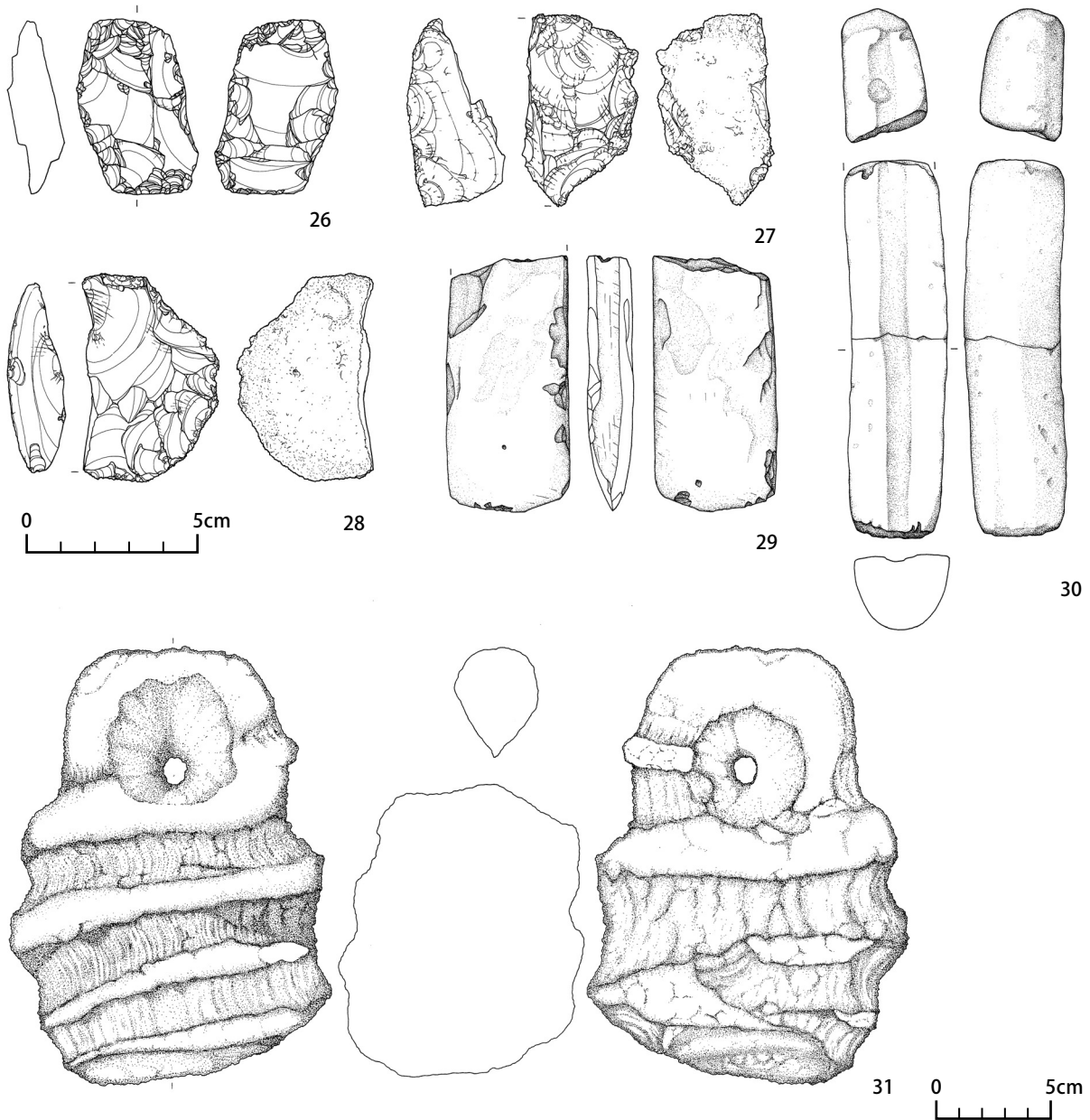


Fig. 89 8号竪穴床面出土の石器2

また、2・5・8・17は、いわゆる梨肌の黒曜石である。

有茎の形態が基本となり、平行する胴部や段差のある胴部が尖頭部と五角形状をなすもの(6・7・9)、胴部が内反したり凹凸をなすもの(5)、胴部末端(かえし)が突出するもの(1・10・14)が組み合わさる。15は、他のものよりも茎部が太く菱形に近い全体形状である。長さ2.5cm～4cm、厚さ3mm～5mmのサイズが主体となるが、1は特に小形(1.9cm)、4は薄身(2mm)である。

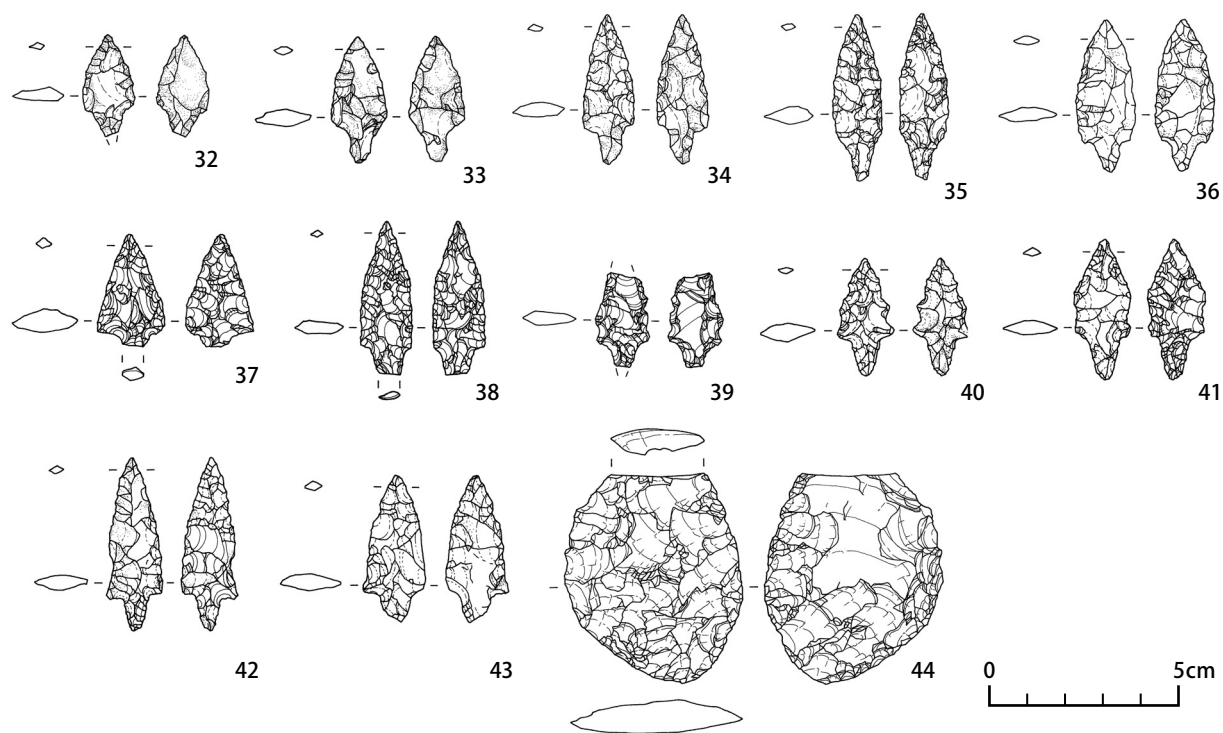


Fig. 90 8号竪穴骨塚出土の石器



Fig. 91 8号竪穴（古段階）出土の石器

16・17は無茎鏃で、緩やかな凹基を持つ。16は薄身(2.5mm)の剥片の周縁に二次加工を施したもので、素材剥片の背腹両面が大きく残る。17は4cmほどの長身で、基部両端(かえし)が突出する。

9のみ竪穴埋土からの出土である。

#### 両面加工尖頭器 (Fig.88-18～21)

すべて黒曜石製で、20・21は梨肌の石質である。いずれも石槍と考えてよいと思われるが、18～20は未成品もしくは破損品であり、19・20には折面からの剥離痕が観察される。21は、長さ10.2cm、幅3.5cm、厚さ10mmの完形品で、基部側縁に抉りが入る。

**石製ナイフ・スクレイパー (Fig.88-22～25)**

すべて黒曜石製で、23は梨肌の石質である。

22～24は二次加工によって概ね50°以下の比較的鋭利な刃角を作り出したナイフである。22は竪穴覆土から出土した。石刃様の縦長剥片を素材としてつまみ部を形成した石匙であり、先端部が錐状に突出する。23は大形で厚身(13mm)の剥片を素材とし、縁辺の二次加工も若干粗い。24は縁辺に細かな二次加工が施されるが、剥離の形状が不規則である。

25は、素材背面への二次加工によって概ね50°を超える刃角を形成した収斂形の削器で、特に先端側が急角度となっている。素材面に対して二次加工の剥離面は新鮮であり、刃部のリダクションを窺わせる。

**楔形石器 (Fig.89-26)**

梨肌の黒曜石製である。上下左右から対向するように薄く不規則な形状の剥離痕が入り、端部が薄く中央部が厚い器体をなしている。

**石核 (Fig.89-27・28)**

黒曜石製で、27は梨肌の石質である。いずれも円礫面を打面として長さ5cm以下の幅広・横長剥片を求心的に剥離しているが、器体の左半分を欠損している。

**石斧 (Fig.89-29)**

暗緑灰色の片岩製である。よく研磨された側面を持つ扁平な定角形の石斧であるが、片理に沿った割れ口が所々に残る。刃部には細かな剥離痕がみられる。

**有溝砥石(矢柄研磨器) (Fig.89-30)**

多孔質安山岩製で粗い石質である。横断面略半円形の細長い器体の平坦面に、幅7mm、深さ2mm程度の半円状の断面からなる1本の溝が通っている。

**石錘 (Fig.89-31)**

礫岩製の有孔石錘で、長さ19.0cm、幅13.4cm、厚さ10.5cm、重さ2.49kgを測るが、下部(錘部)で厚く上部(孔部)で厚みの弱い形状となっている。幅2.5cm～3cm、深さ5mm程度の溝が上部の孔から底部に向かってらせん状にめぐる。非常に粗い石質で、製作痕や使用痕の観察が困難である。

**② 8号骨塚出土 (Fig.90)**

点取り遺物は、石鏃12点、両面加工尖頭器2点、石製ナイフ1点の計15点である。

**石鏃 (Fig.90-32～43)**

いずれも黒曜石製であるが、被熱したものが多く、32～36・38・40～43は表面変化や変形が著しい。また、37は梨肌の石質である。

すべて有茎の形態で、長さ2.5cm～4.5cm、厚さ3mm～5mmのサイズからなるが、長さ4cm前後の比較的大形のものが主体となる。平行する胴部や段差のある胴部が尖頭部と五角形状をなすもの(38)、胴部が内反したり凹凸をなすもの(39～41)、胴部末端(かえし)が突出するもの(42・43)、もしくはこれらに近い形状のものが組み合わさる。



石製ナイフ (Fig.90-44)

44 は緻密な黒色安山岩の剥片を用い、両面への入念な二次加工によって緩やかな弧状の刃部を作り出している。

③ 8号 (古段階) 床面出土 (Fig.91)

石鏃 1 点と剥片 3 点が出土している。

石鏃 (Fig.91-45)

45 は黒曜石製の無茎鏃である。緩やかな凹基をなし、両側縁は細かな二次加工によって整形されているが、下縁部の加工はやや粗い剥離による。

④ 8号 竪穴埋土出土

床面の比較的近くから出土した竪穴埋土の点取り遺物として、石鏃 2 点、両面加工尖頭器 3 点、石製ナイフ 1 点、凹石 1 点、剥片 13 点の計 20 点がある。その一部については床面出土遺物の記載で触れている。

(山田 哲)

3-3 骨角器

① 8号 床面出土 (Fig.92)

1～4 は雌性 I 類の銛頭である。1 はほぼ完形、2 も尾部端を欠くのみである。1・4 は尾部端に突起をもつ。3 は扁平で索溝を両側からの抉りで済ませている。5 は鳥管骨の切断品の破片だが、骨鏃Ⅲ類の可能性はある。6 はエイの尾棘製の刺突具。7 は線刻をもつ棒状製品 I 類の破片である。8 はクックルケシ状の有孔円盤形の垂飾である。表面には浮線による装飾が施される。同心円を基調とするが、外から 3 本目のものは辺が内湾する七角形に近い。9～12 は U 字形の釣針軸の屈曲部である。10 は残存長で 15cm を越え、9・11 も同様のサイズだったと考えられる。12 は一回り小さかっただろう。11 の外縁はよく磨かれており、掘具の再加工品だった可能性もある。13 は棒状製品Ⅲ類で細長い器体をきわめて薄く加工している。破片 2 つは近接して出土したが、接合しなかった。少なくとも 6 カ所に穿孔しており、孔の位置は中心軸からややずれているものが多い。

② 8号 骨塚出土 (Fig.93-14～16)

14 は棒状製品Ⅱ類で、上端を A 形に切り出している。15・16 は下端を切断した鳥管骨製品である。頭部を欠損するが、骨鏃Ⅲ類の破片の可能性はある。

③ 8号 小骨塚出土 (Fig.93-17)

17 は損傷が激しいが、鯨骨製の掘具の破片だろう。側縁には着柄用の突起をもっていたと考えられる。

④ 8号 埋土・攪乱出土 (Fig.93-18～22)

埋土と攪乱から出土した垂飾と動物意匠の彫刻類で、21 が攪乱、他は埋土から出土した。18・19 はクックルケシ状の垂飾である。厚みのある有孔円盤形で、同心円を基調とした浮線文様をもつ。20 はクマと思われる四足獣を浮き彫りで表した彫刻である。21 は器面に楕円形に 7 個の刻みをいれたものや鱈

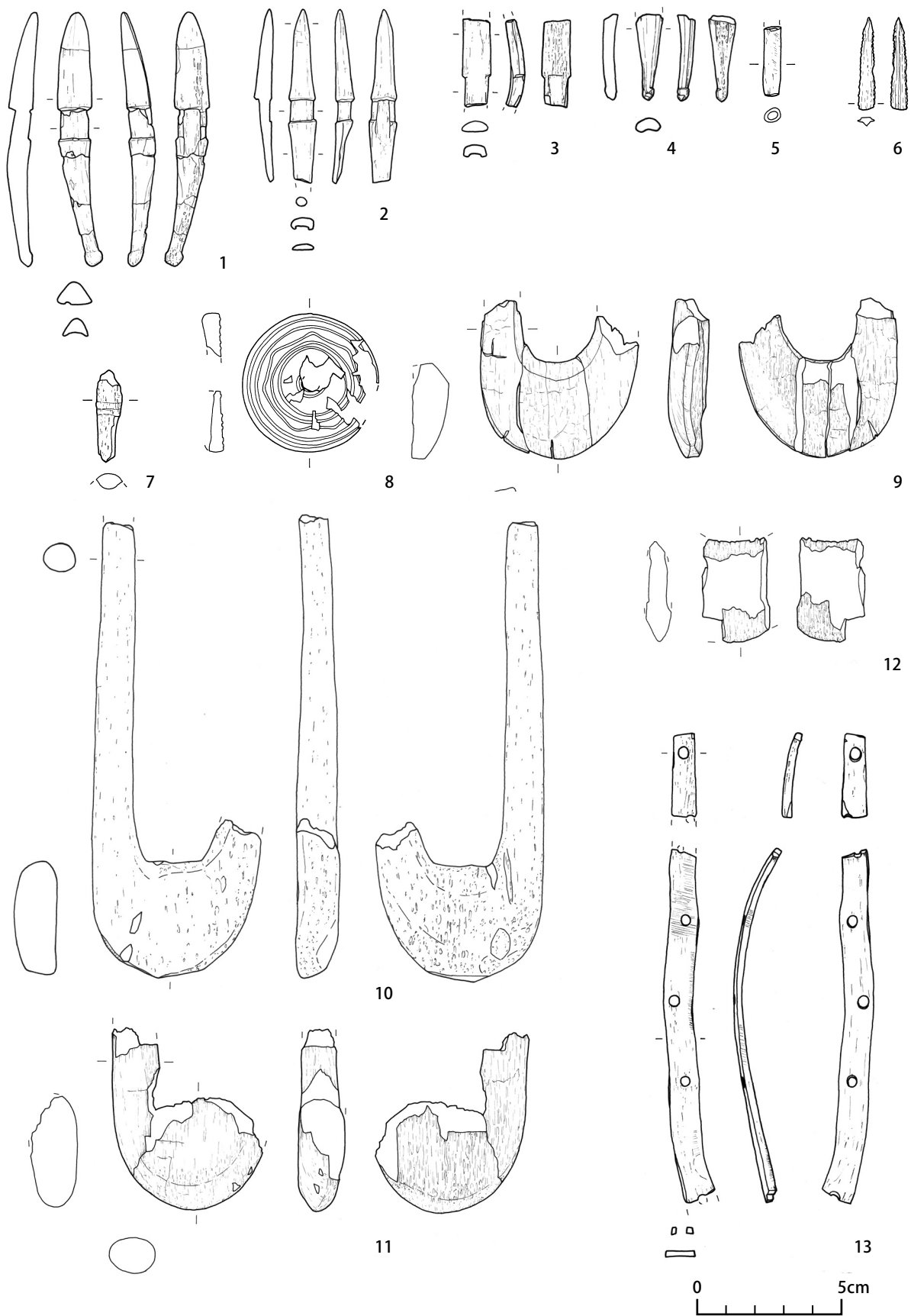


Fig. 92 8号竖穴出土の骨角器 1 (1~13 : 8号床面)

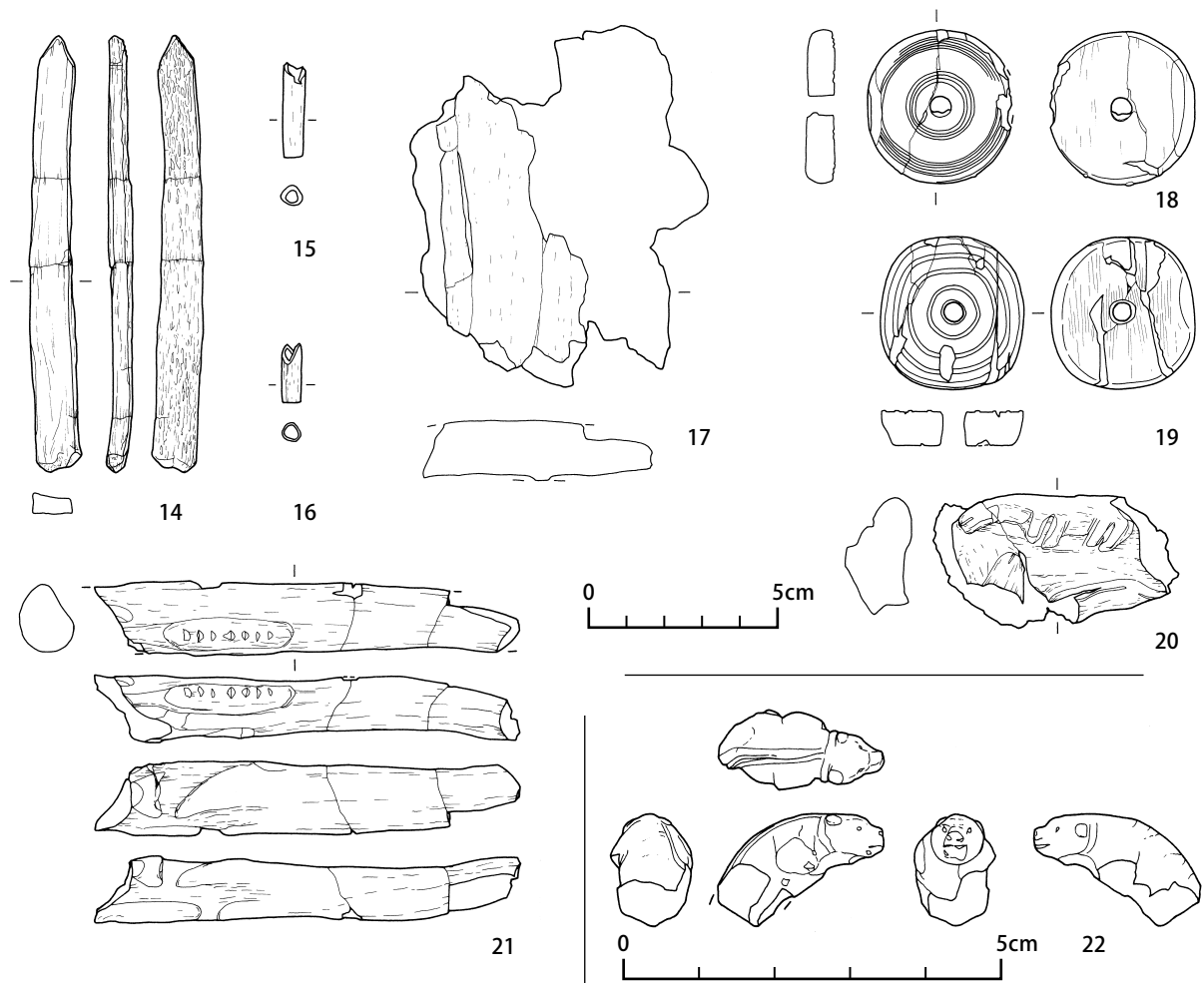


Fig. 93 8号竪穴出土の骨角器2 (14~16 : 8号骨塚、17 : 8号小骨塚、18~22 : 8号埋土)

状のモチーフを浮き彫りにしている。22は残存長22mmと非常に小形だが、頭部から胴部にかけてのクマを表している。クマの首回りと背筋右側には浮線が施される。

(高橋 健)

### 3-4 木製品 (Fig.94 ~ Fig.95)

8・10~12・15はⅡ層あるいはⅢ層出土で、他は床面からの出土である。Ⅱ層・Ⅲ層出土のものは出土位置からすると8号竪穴に伴うとは言えないが、他の床面出土資料は伴出品としてよい。

1・2は、床面直上部出土の樹皮製品である。隅丸方形で方形の孔が開き、若干反りがみられるが、用途は不明である。3は、Ⅲ層出土の環状の木製品である。4は、床面直上部出土の弓である。一部欠けてはいるが、弓弭部分がていねいに作出され、本体部分は削り痕がみられる。5も床面直上部出土の

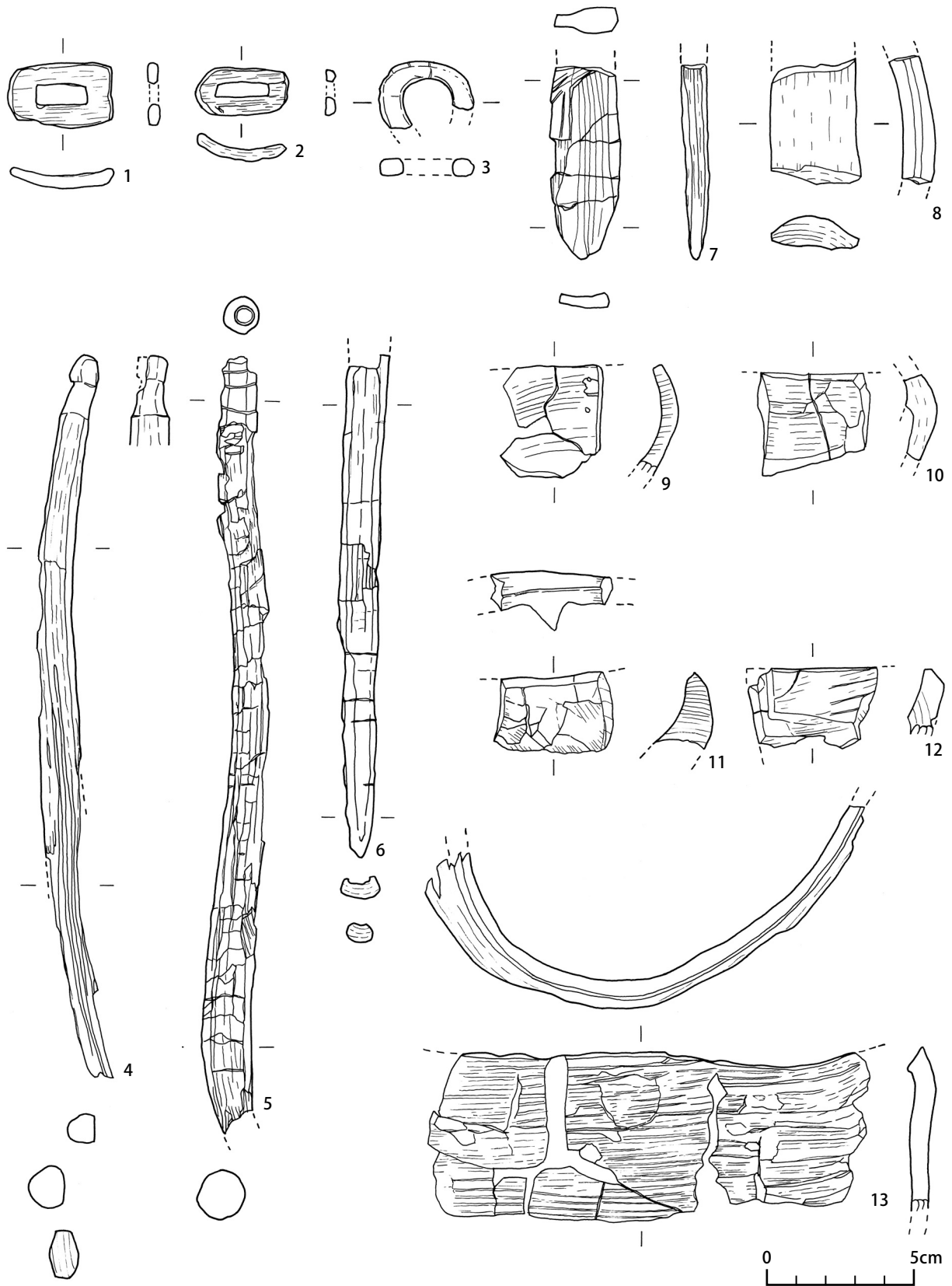


Fig. 94 8号竖穴出土の木製品 1

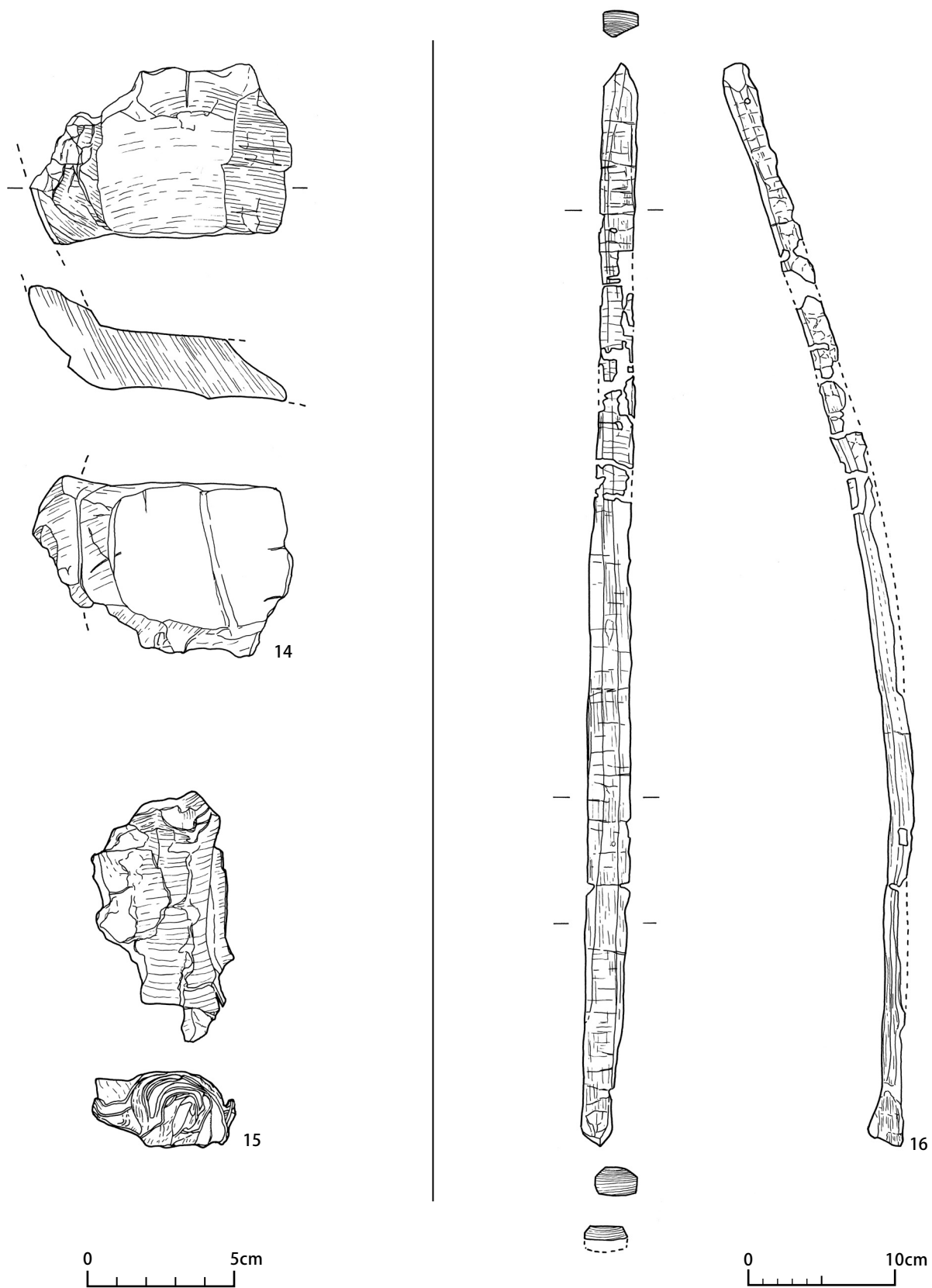


Fig. 95 8号竪穴出土の木製品2

弓と考えられる木製品である。上部には4本の溝が刻まれているが、何らかの文様の一部と思われる。全体的に削りがなされているが、湾曲しているのは、被熱あるいは土圧のせいである可能性が高い。6も床面出土で、長い棒状木製品である。全体的に削り痕がみられるが、下端は尖らせている。7は、床面直上部出土の篋状の木製品である。側縁も面取りされている。8は、Ⅱ層出土の棒状木製品である。側縁にも削りがみられる。9は、周溝内で出土した椀状ものの口縁部である。縦に2個の小孔がみられる。10は、Ⅱ層出土の椀状の口縁部付近と思われる。11もⅡ層出土であるが、椀の口縁部である。口唇部には突起状の稜が認められる。12もⅡ層出土で、板状木製品である。上端は2方向に面取りがなされている。13は、床面直上部出土の木製容器である。厚さ5mm弱で、上端の口唇部は内側に斜めに削られている。14は、床面出土の椀状容器の底部と思われるものである。両面ともに削り面が残っている。15は、Ⅲ層出土の樹皮製松明である、16は、床面出土の木刀状のもので、長さ72.8cmを測る。

(宇田川洋)

### 3-5 金属器

#### ① 8号床面出土 (Fig.96-1～4)

1は床面(ウ区)から出土した完形の片区(刃区)の刀子である。刃部は緩やかに上方へ反り、刃部中央から区側にかけて研ぎ減りと思われるゆるやかな凹みがある。刃部の断面をみると、やや片刃に近い両刃(偏心両刃)となっている。茎部分や脊の部分には鍛打の痕跡が良く残る。茎尻の横断面を見ると、茎尻に向かって細く尖っている。柄へ差し込む際に必要な形状であったと言える。1号竪穴から出土した青銅製刀子に類似しており、また、曲手刀子の製作工程を想定しうる重要な資料である。2は床面(ウ区)から出土した曲手刀子である。刃部を半ばで欠いている。3は床直(ア区)から出土した曲手刀子である。茎がやや下方へ曲がっている。ほぼ完形であるが、区部分の錆が著しく内部が中空になっている。遺存状態の良い鋒部分の断面は片刃になっている。4は床面(エ区)から出土した無茎鏃である。鋒がやや細くなり、長三角形である。基部は少し凹基になっている。横長の長方形の窓を持っているが、何かを通したような痕跡は残っていない。むしろ、毒などを溜めるための機能を考えるべきかもしれない。

#### ② 8号竪穴埋土出土 (Fig.96-5～15)

5はⅠ層(ア区)出土の鉄製品である。当初は曲手刀子の可能性も考えられたが、錆び方が近世・近代の鉄製品に似ており、明らかに他のオホーツク文化の鉄製品とは異なっていることから、新しい時期の遺物であると考えられる。その場合、鉄鍋の鉸である可能性が最も高い。6はⅠ層(ア区)から出土した鉄製小札である。2×5の孔が確認できる。下端は折れている。しかしながら、折損部分が他の部分と同じような錆び方をしている点、側面からみた場合大きく湾曲している点などから、使用(ないしは再利用)時には既にこの形態であったと考えられる。鉄鍋の補修具(例:平取町二風谷遺跡例)や装身具、音響具などの用途が想定される。7はⅠ層(ア区)出土の鉄製品である。断面は長方形をなしている。器種は不明である。ア区のⅠ層からは鉄製品が比較的多く出土している。これらは近世以降のもので、おそらくはチャシが使用されていた時期から近代にかけて竪穴の窪みに投げ込まれたものと考えら

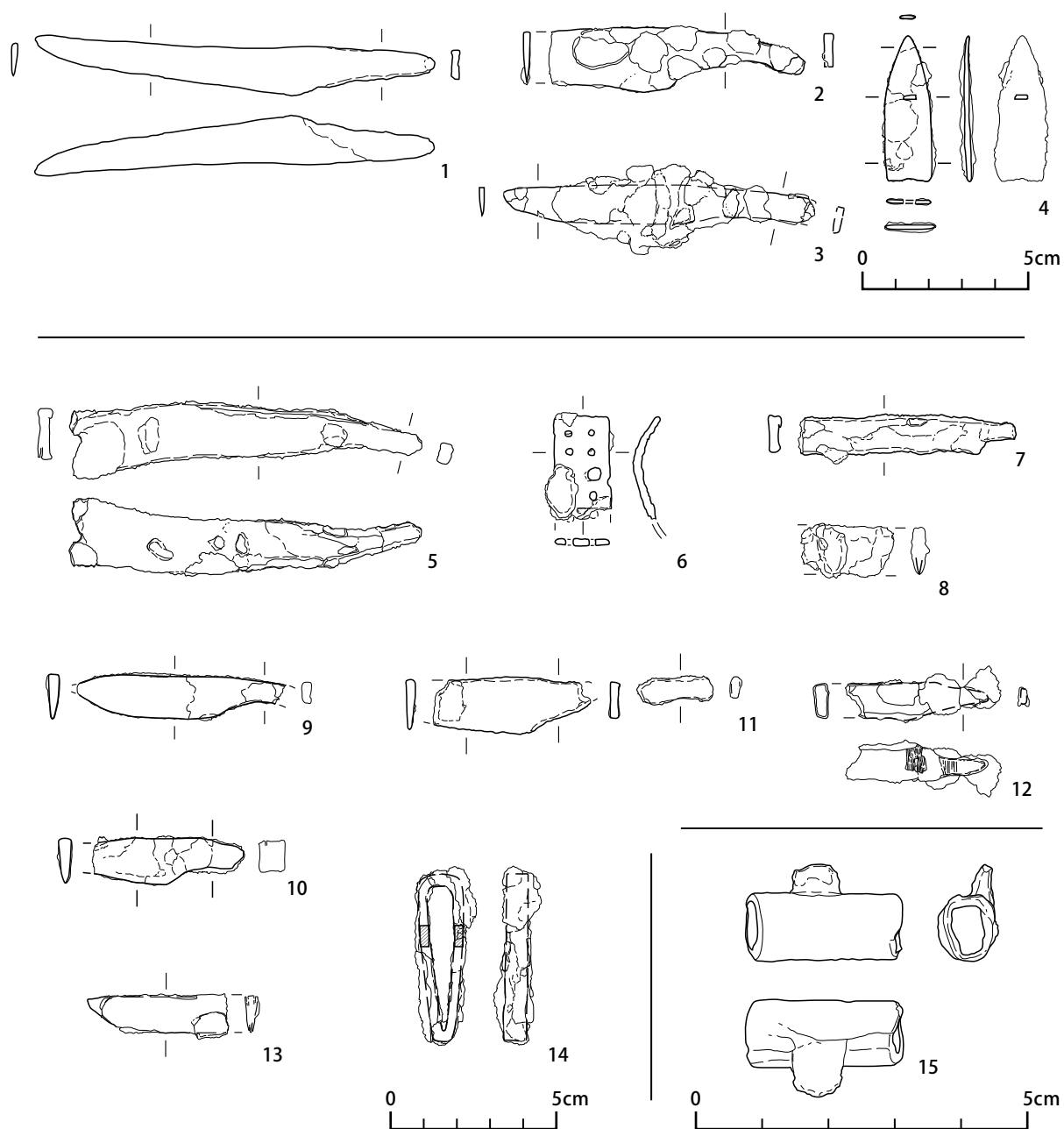


Fig. 96 8号竪穴出土の金属器 (1~4: 8号床面、5~15: 8号埋土)

れる。8はI層（イ区拡張部）から出土した刀子である。刃部の破片で両端を大きく欠いている。断面の観察から刀子の刃部であることは間違いない。I層の出土であるため、帰属時期は不明であるが、錆び方から判断すればオホーツク文化の刀子の可能性はある。

9はII層（エ区）から出土した曲手刀子である。刃部の断面は片刃である。茎尻を欠損しており、鋒

もわずかに欠いている。形態からオホーツク文化の所産と考えられる。10はⅡ層（イ区）から出土した曲手刀子である。刃部を半ば欠いている。刃部の断面は片刃になっている。茎は錆化が顕著で内部が中空になっている。11はⅡ層（ウ区）から出土した曲手刀子である。破損後に錆びたためか、明確には接合しないが、出土位置や形状から同一個体と判断した。その場合、刃部を欠く曲手刀子となる。茎部分を鍛打により成形したためか、区から茎部分にかけて鍛打の痕跡が顕著に残る。

12はⅢ層（ア区南北ベルト）から出土した曲手刀子である。錆膨れが著しく、内部が溶脱して中空となっている。刃部は欠損している。区と茎の一部に木質が残っており、呑口式の刀子であった可能性が高い。13はⅢ層（エ区）出土の刀子の刃部破片である。錆膨れのため、層状に剥離している。14はⅢ層（ウ区）出土の鉄製の刀装具である。足金物の一部ないしは柄縁の可能性が考えられるが、詳細は不明である。トコロチャシ跡遺跡から出土したとされる蕨手刀（北海道開拓記念館の加藤コレクション）の区付近の大きさとこの資料の内法がほぼ同じである。

15はⅡ層（ウ区短軸サブトレ）から出土した筒状の青銅製品である。貼床上のⅢ層に近接して出土しており、オホーツク文化の青銅製品の可能性がある。本資料は、筒状の部分と突起部からなる。突起部と筒状の部分は別造りで、巻き込みながら鍛接している。用途は不明であるが、装飾品である可能性が高い。

（笹田朋孝）

#### 4 小括

8号竪穴では古い段階の竪穴（8号竪穴（古段階））が存在した後、壁をほぼ同じ位置で改築して貼床部分のみを縮小した建て替え（8号竪穴）が行われた。8号竪穴は廃絶時に火を受けていることが確実であり、8号竪穴（古段階）については火を受けた痕跡は一部に確認されたものの焼失かどうか確定できなかった。竪穴の時期は8号竪穴・8号竪穴（古段階）ともにオホーツク文化貼付文期である。

8号竪穴の特徴としては、住居の建て替えの様相が7号・9号・10号とはやや異なっている点があげられよう。具体的には壁の位置や住居の面積をほとんど改変せずに建て替えを行っていること、建て替え前の廃絶時に火を受けた痕跡が明瞭ではなく古い段階の壁材が全く残っていなかったこと、古い床面よりわずかに上層に新しい生活面を形成していることなどが特徴的である。本報告では、本竪穴で行われた改築と他の竪穴の建て替えとは様相が異なると評価し、本竪穴の例については「8a号・8b号」ではなく「古段階」の表記を用いた。他に本竪穴の遺構に関しては、奥壁側の骨塚とは別に小骨塚が住居の開口部側に存在することや、粘土と板張りを組み合わせて貼床を構成している点などが注目されよう。

出土遺物で最も注目されるのは、Fig.93-22のクマの彫刻であろう。この彫刻の首と背中に描かれた浮線は、首に縄が巻かれてそこから紐で繋がれた様子を表現したものである可能性が高く（宇田川2002）、クマ送り儀礼との強い関連が推測される。なお、埋土からややまとまって出土した近世以降の



## 第二章 遺構各説

鉄器からは、竪穴の窪みを利用した送り場遺構の存在が予想されるが、鉄器のまとまり以外に送り場の存在を示すような痕跡は確認できなかった。

(熊木俊朗)

### 引用文献

宇田川洋 2002 「オホーツク『クマ祀り』の世界」『東京大学コレクションXIII 北の異界』東京大学総合研究博物館：106-120